佐賀大学国際交流推進センター
平成28年度 年次報告書

Annual Reports of Center for Promotion of International Exchange
Saga University　April 2016- March 2017

佐賀大学

ANNUAL REPORTS

目　次

Ⅰ．国際交流企画推進室 …… 2
1．学術交流協定…… 2
2．海外ネットワークの構築と情報発信…… 2
2．1　佐賀大学ホームカミングデー in ハノイ
2．2　佐賀大学プロモーション in ハノイ
3．佐賀大学友好特使の委嘱と活動…… 4
4．佐賀大学ハノイ・サテライトの活動…… 5

Ⅱ．学生交流部門 …… 5
1．留学生受け入れ…… 5
1．1　留学生受け入れの概況
1．2　佐賀大学短期交換留学プログラム
1．2．1　SPACE−E 実施報告
1．2．2　SPACE−J 実施報告
1．3　平成28年度日本語・日本文化研修コース
1．4　平成28年度日本語研修コース
1．5　Saga University Summer Program（SUSP）2016
1．6　香港中文大学学生交流プログラム（短期受入れ）
1．7　留学生支援事業
1．7．1　短期留学生受入支援事業
1．7．2　特別聴講生・特別研究学生等　学習奨励費支援事業
2．学生の海外派遣……21
2．1　本学学生の海外派遣概況
2．2　交換留学生の派遣
2．3　トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムによる海外派遣
2．4　Saga University Study Abroad Program（SUSAP）
2．5　学生の海外派遣支援事業
3．キャンパスの国際化……39

Ⅲ．学術研究協力部門 ……41
1．国際研究集会開催支援事業……41
2．研究者海外派遣支援事業……42

Ⅳ．地域国際連携部門 ……44
1．「平成28年度産学官国際交流セミナー」の開催 ……44
2．トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム「地域人材コース」……45
3．佐賀県立武雄高校との交流……46
4．地域国際交流行事等への協力……47
5．佐賀県との連携……49

資料

Ⅰ．国際交流企画推進室

１．学術交流協定

平成28年度は新規の大学間協定締結が３件あった。ベトナムのカントー大学はメコンデルタにおける中心的な大学であり、農業や水産養殖に関連する教育・研究が著名である。今後、この地域で増加が見込まれる農学的・工学的課題を解決するための共同研究を行える可能性が高く、また人材教育において積極的に本学が貢献する意義も大きいと考えられることから協定締結が実現した。一方、オランダ及びドイツの２つの高等教育機関との学術交流協定締結においては、有田窯業大学校が当該大学と展開していた交流を本学が継承・発展させることを目的として締結された。積極的な学術交流により芸術地域デザイン学部のみならず、様々な領域に波及させることで、教育の国際化や地域社会の発展に寄与することが期待されている。

【新規】

カントー大学（ベトナム）・国立大学・H28年８月21日締結

デザインアカデミーアイントホーフェン（オランダ）・私立大学・H28年10月19日締結

ブルク・ギーヒェンシュタイン芸術デザイン大学ハレ（ドイツ）・国立大学・H29年３月30日締結

２．海外ネットワークの構築と情報発信

海外ネットワークを構築・強化・掘り起すための一つの取り組みとして、佐賀大学海外版ホームカミングデーを毎年実施している。今年度は５年ぶりベトナム・ハノイにおいて、２回目の「佐賀大学ホームカミングデー」を以下のとおり開催した。

２．１　佐賀大学ホームカミングデー in ハノイ

【日時】平成29年２月11日（土）

【会場】クラウンプラザ・ウエスト・ハノイ（ハノイ市内）

【概要】

佐賀大学海外版ホームカミングデーは、海外の協定校との連携の強化、及び海外在住の卒業生や留学生、佐賀県出身者、佐賀大学を支援くださる企業人等が一堂に会し、佐賀大学関係者のネットワークの強化を目的として毎年開催している。当日は元佐賀大学留学生が教職員として６人勤務するベトナム国家大学ハノイ外国語大学が中心となって、ハノイ自然科学大学、ハノイ農業大学、ハノイ水利大学のほか、中部ベトナムからビン大学、南部メコンデルタからアンザン大学が駆けつけてくれた。協定校以外にも、日越政府主導によって設立された日越大学や、ベトナム国家大学人文社会科学大学、在ベトナム日本国大使館、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターなどの在ベトナムの関係機関からもご出席を賜った。また、佐賀の民間企業を代表し、神埼市に本社を構える株式会社大橋も佐賀からご参加頂いた。その他、元留学生や佐賀大学への留学を控えた現地学生等が集まり、総勢40人余りの盛大な会となった。

はじめに本学の滝澤理事・副学長より挨拶があり、その後、在ベトナム日本国大使館の穴澤葉子広報文化班長、ハノイ国家大学外国語大学のゴー・ミン・トゥイ副学長、日越大学の古田元夫学長等より祝辞を頂戴した。また本ホームカミングデーにおいて、ゴー・ミン・トゥイ副学長に対して、佐賀大学友好特使を新たに委嘱した。そ

の後、ベトナム元佐賀大学留学生会の結成と活動報告、新たに立ち上げたフェイスブックが初代会長のグエン・ドゥック・フイ、副会長のブイ・ディン・タンより紹介された。

ホームカミングデーの記念写真

ホームカミングデーで挨拶をする滝澤理事・副学長

ゴー・ミン・トゥイ先生に友好特使の委嘱

ベトナム元佐賀大学留学生会による活動報告

2．2　佐賀大学プロモーション in ハノイ

【日時】平成29年２月10日（金）

【会場】ベトナム国家大学ハノイ人文社会科学大学

【概要】

ハノイ人文社会科学大学は人文社会科学系総合大学としてベトナムを代表する大学で、ゼンショー東京大学・ベトナム国家大学ハノイ校日本研究拠点の事務所が設置されている。当時は、Pham Quang Minh 学長他、日本の大学で学位を取得した Nguyen Phuong Thuy 東洋学部講師などと、佐賀大学の PR 及び学術・学生交流等についての意見交換を実施した。今回の訪問は昨年３月につづき２回目となる。

【日時】平成29年２月10日（金）

【会場】ハノイ水利大学

【概要】

ハノイ水利大学は、本学低平地沿岸海域研究センターの拠点校の一つで、本学で学位を取得した教員が勤務している。また、昨年度は JST のさくらサイエンスプランで本学との学術・学生交流を深めた。当日は Nguyen Canh Thai 副学長をはじめ、元佐賀大学留学生等にも集まって頂き、本学との今後の連携や交流について意見交換をおこなった。また、佐賀県企業の（株）大橋からも産学連携など具体的な提案がなされた。

滝澤理事・副学長とハノイ人文社会科学大学学長他

滝澤理事・副学長、日野教授（低平地沿岸海域研究センター）とハノイ水利大学副学長他

その他、ベトナム・ハノイでのホームカミングデー開催に先立ち、タイ・バンコクにおいて小規模ながら昨年度にひきつづき本学友好特使の Dr.Panmanas キング・モンクット工科大学准教授をはじめ、元佐賀大学留学生や現地で活躍しいている佐賀県企業の駐在員などにも集まって頂き、タイでの佐賀大学関係者のネットワーキング・ミーティングを開催した。

また、ホームカミングデー後には、本学国際交流推進センターの新美准教授と農学部の辻准教授がラオス国立大学を訪問し、本学農学部との連携強化並びに学生交流促進について意見交換を実施した。

佐賀大学・タイネットワーキング・ミーティング

ラオス国立大学国際関係室長と農学部辻准教授、国際交流推進センター新美准教授

３．佐賀大学友好特使の委嘱と活動

佐賀大学では帰国留学生等を佐賀大学の友好特使として委嘱している。この友好特使を通じて海外の教育・研究情報、現地ネットワークに関する情報の収集や発信を行い、留学生との交流および国際学術交流の推進を図っている。本年度も新たに、１人の方に佐賀大学友好特使を委嘱した。ベトナムのゴー・ミン・トゥイ（ハノイ外国語大学）副学長には、本学との協定締結からこれまで多くの学生交流を支援頂き、佐賀大学の海外拠点であるハノイ・サテライトをいち早く設置頂くなど多大なご尽力賜った。今後、佐賀大学海外同窓会ネットワーク（ベトナム元佐賀大学留学生会）をフェイスブックの活用で更に強化していくことに期待している。

国名	名前	所属・職名	活動
ベトナム	ゴー・ミン・トゥイ	ベトナム国家大学 ハノイ外国語大学副学長	佐賀大学ベトナム人元留学生 ネットワークのキーパーソン

４．佐賀大学ハノイ・サテライトの活動

平成21年９月、ベトナム国家大学ハノイ外国語大学内に佐賀大学初の海外サテライトオフィスを設置した。この間、多くの日本の大学や政府機関関係者が立ち寄り、情報交換の場として活用されてきた。その後、平成27年４月から文化教育学部が「教育学部」と「芸術地域デザイン学部」とに改組され、従来の文化教育学部のツイニング・プログラムの受入を停止することになった。これまで、ハノイ外国語大学から交換留学生の他にツイニング・プログラム等を通じ、45人の学生を受け入れてきた。そのうち15人が正規留学生として佐賀大学に進学している。この実績は、ハノイ外国語大学にある佐賀大学のサテライトの役割を十分に果たした結果であった。他方で、上記のような本学の学部改組によるツイニング・プログラムの終了や現在多くの日本の大学がベトナムにサテライトを設置し、日本留学の情報を直接入手することが容易になっている環境の変化等から、本学サテライトは当初の役割を終え、新たな段階へ進むことが求められていると判断した。その結果、今年度をもって本学サテライトは発展的に解消することとなった。

ベトナム・ハノイでのホームカミングデーの前日、ハノイ外国語大学との学術交流協定締結10周年記念として、滝澤理事・副学長よりハノイ外国語大学に対して感謝状をお送りし、サテライト閉鎖後も引き続き学術・学生交流を活発に促進していくことを約束した。

ハノイ外国語大学との協定締結10周年記念式典

今年度で閉鎖となる佐賀大学ハノイ・サテライト

Ⅱ．学生交流部門

１．留学生受け入れ

１．１　留学生受け入れの概況

平成24年から平成28年（５月１日）までの過去５年間の留学生数（学位取得を目的とする留学生、交換留学生、研究生）の推移を以下に示す。平成23年は前年から１％強の減少であった留学生数が、平成24年には同６％減、その後も減少し、平成26年・27年と10％以上の減少となっている。その後横ばいとなり平成28年には207人となった。直近の統計である平成28年10月秋入学者時には、ようやく反転し224人と前年比１割の増加となっている。これを国籍別（表１）でみると、中国人留学生の減少が最多で82人の減少、割合でも平成24年比で57％減となっている。この減少数がこの５年間の留学生減少数の大半を占めている。次いで、インドネシア人留学生が18人減

少しており、割合では約64％の減少であった。これは前年度より引き続きインドネシア政府（DIKTI）奨学金の受給対象大学から外れたことで、政府奨学金を受給して本学に留学することができなくなったことが大きく影響していると推測されており、今年度も各方面よりインドネシア政府に働きかけている。大きく減少しているこれらの国の一方で、バングラディッシュからは５年前比で11人増（85％増）、タイからも13人増（3.15倍）となっており、またエジプト、モザンビーク、セネガル、チュニジア、モロッコといったアフリカ諸国からの学生を新規に受け入れており、受け入れ国の多様化が進んでいる。

次に学生の在籍身分別（表２）の推移をみると、減少しているのは学位取得をめざした正規留学生・研究生が多く占めている。他方、特別聴講学生（交換）・短プロ SPACE（交換）の協定校からの交換留学生数は50人前後で推移しており、平成28年はほぼ定員を満たしている。更に正規留学生のなかでも学部及び大学院別では、学部所属の留学生数は平成24年から平成28年では43人（42％減）の減少で、大学院でも29人（24％）の減少となっている。

本学の減少している留学生の特徴は、以上のように、国籍・地域別では中国・インドネシアからの留学生であり、協定校からの交換留学生以外の学位取得を目指した学部学生及び大学院生であることがわかる。このことから、一つには急激に減少している学部への留学生受入を再検討する必要がある。他方で大学院レベルでは、相手国政府奨学金の獲得を本学からも積極的に支援すること、各研究科が実施する特色ある留学生受入プログラムや、海外の大学等と連携して実施する共同研究などを促進し、本学大学院への進学を促す必要がある。そのためには、積極的な日本留学フェア等への参加や継続的な協定校等への直接的訪問などによる佐賀大学のプロモーション活動、本学で学位を取得し帰国した元留学生等との交流強化及びネットワークの活用、同時にホームページや SNS 等による広範囲な不特定多数に向けた大学広報等を行なう必要があるであろう。

【表１】平成24年～28年　国籍別留学生数の推移

（毎年５月１日集計）

国・地域		H24	H25	H26	H27	H28
アジア	中国	145	136	109	93	63
	インドネシア	28	22	17	5	10
	マレーシア	20	24	21	20	16
	韓国	19	16	16	9	18
	バングラデシュ	13	11	7	18	24
	ベトナム	18	14	13	17	12
	台湾	9	8	14	11	11
	タイ	6	11	10	12	19
	スリランカ	9	7	8	5	6
	ネパール	5	2	2	2	3
	カンボジア	1	1	4	1	3
	ミャンマー	0	0	0	1	3
	モンゴル	1	1	1	0	0
	パキスタン	0	0	0	1	1
	ラオス	1	0	1	0	0
	インド	0	0	0	1	0
中南米	ブラジル	0	0	0	0	1
中近東	イラン	1	1	1	0	0
アフリカ	エジプト	0	1	1	2	3

アフリカ	サントメ・プリンシペ	0	0	0	0	0
	ウガンダ	1	1	0	0	0
	ナイジェリア	0	0	0	0	0
	モザンビーク	0	0	0	1	2
	ケニア	0	0	0	1	1
	セネガル	0	0	0	0	1
	チュニジア	0	0	0	0	1
	モロッコ	0	0	0	0	1
	南スーダン	0	0	0	0	0
北米	アメリカ	0	2	2	1	1
	カナダ	0	0	0	0	0
オセアニア	オーストラリア	0	0	1	3	1
ヨーロッパ	オランダ	0	0	0	0	0
	フランス	1	2	2	1	2
	フィンランド	0	0	0	2	1
	ポーランド	1	0	0	1	0
	リトアニア	0	1	0	1	0
	アルメニア	0	0	1	0	0
	スウェーデン	0	0	1	0	0
	ベルギー	0	0	1	0	0
	セルビア	0	0	0	0	1
	ドイツ	0	0	0	0	1
	トルクメニスタン	0	0	0	0	1
計		279	261	233	209	207

【表２】平成24年～28年　在籍身分別留学生数の推移　（毎年５月１日集計）

	H24	H25	H26	H27	H28
正規生（学位取得）	195	187	160	144	135
研究生	13	7	4	8	4
特別研究学生（交換）	2	3	2	3	3
特別聴講学生（交換）	30	25	0	0	0
短プロ SPACE（交換）	16	24	57	48	55
科目等履修生	0	0	0	0	0
連合大学院	22	14	7	4	6
日本語・日本文化研修留学生	1	1	3	2	4
計	279	261	233	209	207

※平成25年10月より日本語で専門科目を履修する交換留学生のための短期留学プログラム（SPACE−J）が開始となり、平成26年度特別聴講学生（交換）に分類されていた留学生は短期留学プログラムに加えられている。

１．２　佐賀大学短期交換留学プログラム

１．２．１　SPACE−E 実施報告

■コーディネーター

古賀　弘毅　准教授（全学教育機構）　　丹羽　順子　准教授（全学教育機構）

１．平成28年度春学期（平成28年４月～９月）

■実施概要

平成27年10月に入学した第15期の学生のうち10人が２学期目も続けて科目を学修した。そして、４月入学の学生18人を受け入れた。これら計28人の学生の出身国別の人数は、中国１人、台湾６人、韓国４人、タイ２人、インドネシア８人、フランス２人、アメリカ１人、オーストラリア１人、フィンランド１人、ベトナム１人、バングラデシュ１人である。受け入れ学部別に見ると、教育学部９人、経済学部５人、理工学部６人、農学部６人、芸術地域デザイン学部２人となっている。学生は全員、必修科目である「日本事情研修Ｂ」、選択必修の「日本語」や「異文化交流インターフェイス科目」、および各学部が提供している「専門選択科目（英語による講義）」を履修した。これらの他に、理工学部と農学部に所属する学生は、「自主研究」を履修し、自分の研究課題を設定して、受け入れ教員から個別に指導を受けた。

平成28年度春学期時間割

	月	火	水	木	金
Ⅰ	漢字初級Ⅰ 文法初級Ⅱ 文法中級Ⅰ	会話初級Ⅰ 聴解中級（A）	文法初級Ⅰ 文法初級Ⅱ 会話中級Ⅰ	文法初級Ⅰ 文法中級Ⅰ	会話初級Ⅰ 文法初級Ⅱ 文法中級Ⅱ
Ⅱ	文法初級Ⅰ	会話初級Ⅱ 会話中級Ⅱ	異文化交流Ⅲ	異文化交流Ⅲ	漢字中級Ⅰ English Thesis Writing Ⅰ
Ⅲ	漢字初級Ⅱ 会話中級Ⅰ	理工学紹介Ｂ （オムニバス）	文法発展導入	会話初級Ⅱ 読解中級Ⅰ	
Ⅳ	生物機能化学 関	日本に関する WEB ページ製作応用	SPACE−E 日本事情研修Ｂ	第二言語習得・バイリンガリズム研究入門	
Ⅴ			概説農学と環境学 （オムニバス）		

「日本語」は、能力別クラスになっており、レベル１（日本語初級Ⅰ）からレベル６（上級Ⅱ）まであるが、表１には日本語初級Ⅰから中級Ⅰまでをのせている。

春学期の視察・見学等

H28年	４月	日本事情研修（福岡市民防災センター、九州国立博物館、太宰府天満宮）
	５月	日本文化研修（茶道研修）
	６月	日本事情研修（工場見学：キューピー、キリンビール）

春学期入学者（７ヶ国・地域　14大学　18人）

	国・地域	性別	大学名	在学期間
1	インドネシア	女	シドニー工科大学	１年
2		女	スリウィジャヤ大学	半年
3		女	ブラウィジャヤ大学	半年
4		女		半年
5		男	マラン国立大学	１年
6		男	ボゴール農業大学	半年
7		男		半年
8		女	リアウイスラム大学	１年
9	中国	男	中国農業大学	半年
10	タイ	女	モンクット王ラカバン工科大学	１年
11		男		１年
12	韓国	女	釜慶大学校	１年
13		女		１年
14		女	国民大学校	１年
15	台湾	女	国立台北大学	半年
16		女	国立中興大学	半年
17	フィンランド	男	ユバスキュラ大学	半年
18	オーストラリア	男	シドニー工科大学	１年

自主研究テーマ（平成28年４月～９月）

理工学部	マイクロ波信号処理の実現に向けたマイクロ波機能回路の研究
	せん断打ち抜き加工における破断面の開始点解析に関する基礎的研究
	実用的な SQL 実装のための Web を用いたデータベース学習支援システムの開発
	Web 上で動作するソフトウェアの開発
	Web 上で動作するソフトウェアの開発
	工業用材料の変形挙動および機械的特性
農学部	発酵食品の機能性解析
	アグリツーリズムと農村の持続的発展
	マメ科作物における窒素代謝と一斉登熟性の関係についての研究
	同種２系統の宿主に対する寄生蜂による寄生の影響評価
	イチゴ高設栽培における窒素成分収支の解析
	日本の牛肉生産システム
芸術地域デザイン学部	日本の自動車産業の発展について（特に日産自動車）、デザインと製造方法
	佐賀の美術と文化について

履修学生の専門分野

理工学部：Electronic Engineering, Informatics, Information Technology, Industrial Engineering

農学部：Food Science, Agribusiness Management, Plant Protection, Agrotechnology Agricultural Architectural Environment, Agribusiness

芸術地域デザイン学部：Integrated Product Design, Design and International Studies

２．平成28年度秋学期（平成28年10月～平成29年３月）

■実施概要

平成28年10月に新たに第15期の学生17人が入学した。４月に入学した学生人のうち、残った９人と合わせて26人がSPACE−Eの学生として秋学期の科目を学修した。出身国別の人数は、中国人６人、台湾１人、韓国３人、リトアニア人２人、アメリカ２人、インドネシア５人、バングラデシュ１人、ベトナム１人、オーストラリア１人、タイ人４人である。受け入れ学部別に見ると、文化教育学部７人、芸術地域デザイン学部２人、理工学部15人、農学部２人となっている。学生は全員、必修科目である「日本事情研修Ａ」及び各学部が提供している「専門選択科目（英語による講義）」、さらに必要に応じて「日本語」あるいは「異文化交流」インターフェイス科目を履修した。これらの他に、理工学部と農学部に所属する学生および、ほかの学部の学生で希望する学生は、「自主研究」を履修し、自分の研究課題を設定して受け入れ教員から個別に指導を受けた。

平成28年度秋学期時間割

	月	火	水	木	金
Ⅰ	会話初級Ⅰ　中山 文法初級Ⅱ　平川 文法中級Ⅰ　丹羽・古賀	文法初級Ⅰ　早瀬 会話初級Ⅱ　吉川 会話中級Ⅰ　布尾	文法初級Ⅰ　満生 文法初級Ⅱ　古賀 会話中級Ⅰ　丹羽	文法初級Ⅰ　中山	文法初級Ⅱ　有瀬
Ⅱ	漢字初級Ⅰ　古賀 聴解中級（Ｂ）吉川	Development Economics サーリヤ	異文化交流Ⅱ　ルー	異文化交流Ⅳ　古賀	会話初級Ⅰ　有瀬 会話中級Ⅰ　布尾 英語パブリックスピーキングⅡ　ホートン
Ⅲ	漢字初級Ⅱ　有瀬		我が国の環境保全の最新情報　岡島	会話初級Ⅱ　吉川 読解中級Ⅰ　丹羽	概説・応用生物学（オムニバス）一色ほか
Ⅳ	日本に関するWEBページ製作入門　角	漢字中級Ⅰ　高木	SPACE−E 日本事情研修Ａ 古賀・丹羽		理工学紹介Ａ（オムニバス）松尾ほか
Ⅴ		日本・東南アジア関係論 山﨑			

秋学期の視察・見学等

Ｈ28年　10月	日本事情研修、Ａ（異文化交流Ⅳの学生と一緒に大観峰見学旅行）
12月	日本事情研修、Ａ（武雄高校との国際交流）
Ｈ29年　１月	日本事情研修（羊羹資料館、酒造見学）

SPACE−E 秋学期入学者（６ヶ国・地域　８大学　10人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	リトアニア	男		ヴィータウタス・マグヌス大学	１年
2		女	JASSO		１年
3	アメリカ	男		スリッパリーロック大学	半年
4		男	JASSO		１年
5	台湾	男		国立台北大学	１年
6	バングラデシュ	男	JASSO	チッタゴン大学	１年
7	タイ	女	JASSO	タマサート大学	１年
8		女	JASSO	チェンマイ大学	１年
9	韓国	男		韓国交通大学校	半年
10	インドネシア	男	JASSO	ボゴール大学	半年
11	中国	男		浙江科技大学	半年
12		女			半年
13		男			半年
1		女			半年
15		男			半年
16		女			半年
17	ベトナム	女	JASSO	カントー大学	半年

自主研究テーマ（平成28年10月～平成29年３月）

理工学部	日本建築の様式に関する研究
	ミニ四駆の人工知能技術に基づいた制御の試み
	水酸塩化物の単結晶成長
	相対性理論
	水酸塩化物のラマン分光測定
	特殊相対性理論
	放射線測定：ヨウ化ナトリウム結晶を用いた137Cs からのガンマ線エネルギー測定
	時系列に基づく株価動向予測の解析
農学部	ベトナム・メコンデルタの農業・農村開発について－ドンタップ省を事例に－

履修学生の専門分野

理工学部：Architecture, Applied physics, Computer Science, Mathematics (Information and computing science), Rural development

農学部：Rural development

３．平成28年度インターフェイスプログラム「異文化交流」科目の履修

SPACE−E の学生は、全学教育機構「異文化交流」プログラムが提供する５つの科目（以下のリストの上から５つ）を履修し、正規学生（日本人学生）や他の国からの留学生との交流を通して日本文化、他の地域の文化を知った。また、リストの一番下の科目（異文化交流Ⅳ：SPACE−E との交流）を受講する正規学生（日本人学生がほとんど）と交流授業を持ち、見学旅行を一緒に行った。

春学期

異文化交流Ⅲ	Culture in Dance
異文化交流Ⅳ	地域社会の価値再検討：フィールドワーク

秋学期

異文化交流Ⅱ	Ancient and Modern Traditions of Health in the World
異文化交流Ⅳ	言語学野外手法（Field methods in linguistics）
異文化交流 IV	SPACE−E との交流（日本事情研修、A との合同授業）

1．2．2　SPACE−J 実施報告

■コース概要

SPACE−J は佐賀大学の協定校に所属する学生を対象としたプログラムである。日本語能力試験（JLPT）N２相当以上の日本語能力を有することが参加の前提である。日本語や日本社会について学べるほか、個々の学生の専攻に応じた授業を日本語で履修できるカリキュラムを提供している。また、必修科目である「日本事情研修 C/D」では、学期ごとにテーマを設定し、体験型の学習を行うことで、日本や佐賀についての理解を深めたり、他国からの留学生と交流したりする機会を提供している。

SPACE−J には、レギュラーコースとブリッジコースの２種類が設けられている。来日当初のプレースメントテストの結果、日本語能力が初中級・中級レベルと判定された学生は、ブリッジコースに参加し、日本語を優先的に学修する。１学期終了後に十分な日本語能力を獲得していれば、レギュラーコースに移ることができる。それぞれのコースの履修科目は下記のとおりである。学生は、１学期あたり最低12単位を修得することが求められる。条件を満たした学生には、修了時に佐賀大学から修了証が授与される。

■コーディネーター

布尾　勝一郎　准教授（全学教育機構）　　中山　亜紀子　准教授（全学教育機構）

SPACE−J の履修科目

<table>
<tr><td rowspan="9">SPACE−J</td><td colspan="2" rowspan="3">レギュラーコース</td><td>日本事情研修</td><td>必修２単位</td><td rowspan="9">1学期あたり12単位以上</td></tr>
<tr><td>専門科目等</td><td>選択</td></tr>
<tr><td>日本語科目</td><td>選択</td></tr>
<tr><td rowspan="6">ブリッジコース</td><td rowspan="3">中級</td><td>日本事情研修</td><td>必修２単位</td></tr>
<tr><td>日本語科目</td><td>６単位以上</td></tr>
<tr><td>専門科目等</td><td>最大４単位</td></tr>
<tr><td rowspan="2">初中級</td><td>日本事情研修</td><td>必修２単位</td></tr>
<tr><td>日本語科目</td><td>10単位以上</td></tr>
</table>

■実施概要

１．平成28年度春学期（平成28年４月～９月）

平成28年度春学期のSPACE−Jプログラムの参加者数は、前年度からの継続者も含めると29人（うち、ブリッジコース３人）であった。ブリッジコースのうち１人は、１学期目の終了後に試験を経てレギュラーコースへの移行を認められ、各自の専門分野も履修できることとなった。残る２人は、日本語を中心に学修し、半年の留学期間を終えた。

平成28年度春学期の視察・見学等

平成28年５月	日本事情研修（佐賀県立名護屋城博物館、旧高取亭）
平成28年６月	日本事情研修（佐賀県立武雄高校訪問、武雄市内見学）

春学期入学者（４ヶ国・地域　12大学　20人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	中国	女	私費	遼寧師範大学	１年
2		女	私費	浙江理工大学	半年
3		女	JASSO		半年
4		女	私費		半年
5		女	私費	中国農業大学	半年
6		女	私費	西南政法大学	１年
7	韓国	男	JASSO	国民大学校	１年
8		男	私費	済州大学校	半年
9		男	JASSO	培材大学校	１年
10		男	私費	大邱大学校	１年
11		男	JASSO		１年
12		男	私費	韓国技術教育大学	１年
13		男	私費		半年
14	台湾	男	私費	輔仁カトリック大学	１年
15		女	私費		１年
16		女	JASSO		１年
17		女	私費	文藻外語大学	半年
18		女	私費		半年
19		女	私費		半年
20	ベトナム	女	JASSO	ベトナム国家大学 ハノイ外国語大学	１年

■日本事情研修

春学期の日本事情研修Ｄは、「スポーツ」をテーマとして、柔道体験や、スポーツに関する調査を行い、日本におけるスポーツと自国におけるスポーツの位置づけについて理解を深めた。その他、学外研修として、佐賀県

立武雄高校を訪問し、高校生と交流し、部活動の見学やインタビューも行った。また、当年度から、大陸や朝鮮半島と日本の間の交流についての学びを深めるため、佐賀県立名護屋城博物館および唐津周辺の見学（前学期）を取り入れた。

２．平成28年度秋学期（平成28年10月～平成29年３月）

平成28年度秋学期のSPACE-Jプログラムの参加者数は、前学期からの継続者も含めると28人（うち、ブリッジコース８人）であった。ブリッジコース参加者のうち６人は、１学期終了時にレギュラーコースへ移行、残る２人は、日本語を中心に学修し、半年の留学期間を終えた。

平成28年度秋学期の視察・見学等

H28年　12月	日本事情研修（九州陶磁文化館、窯元見学・絵付け体験、有田ポーセリンパーク、有田町）

秋学期入学者（７ヶ国・地域　12大学　18人）

	国・地域	性別	奨学金区分	大学名	在籍期間
1	中国	女	JASSO	華東師範大学	１年
2		女	JASSO	浙江理工大学	１年
3		女	私費		１年＊
4		女	私費		半年
5		女	私費	浙江大学城市学院	１年
6		女	私費		１年
7		男	私費		１年
8		女	JASSO	西南政法大学	半年
9	韓国	男	JASSO	韓国技術教育大学	１年
10	台湾	女	JASSO	国立政治大学	１年
11		女	JASSO	国立台北大学	１年
12		女	JASSO	国立中興大学	半年
13	ベトナム	女	JASSO	ベトナム国家大学ハノイ外国語大学	１年
14		女	JASSO		１年
15	カンボジア	男	JASSO	王立プノンペン大学	１年
16		男	JASSO		１年
17	ラオス	女	JASSO	ラオス国立大学	１年
18	インドネシア	男	JASSO	ガジャマダ大学	１年

＊は当初半年の予定であったが、滞在期間を１年に延長した。

■日本事情研修

秋学期の日本事情研修Ｃでは、「文化の往還」をテーマとして、「現代の文化」がどのような経路を通じて伝播したのか、またそれがどのように変形して世界に広がり、逆輸入されたのかを、グループで調査し、発表を行った。日本発祥の文化の例として、ゲストスピーカーを招いて折り紙の歴史と現代的な発展について講義を受けた。大阪大学の教員による遠隔授業で、絵画における視線のあり方や、人形やアニメの登場人物の「目」をめぐって、

日本と海外の比較や、文化接触が行われた事例について学んだ。また、学外研修としては、日本の磁器発祥の地である有田を訪問し、佐賀県立有田陶磁器博物館を学芸員の解説を交えて見学したほか、窯元で工房を見学、絵付け体験も行うなど、佐賀及びその文化についての知識を深めた。

■奨学金

平成28年度は、日本学生支援機構海外留学支援制度（協定受入）の申請が採択され、19人に対して支給が可能となった。審査の結果、春学期入学者６人、秋学期入学者13人に支給した。

名護屋城見学

折り紙体験

１．３　平成28年度日本語・日本文化研修コース

■コース概要

本学の日本語・日本文化研修コースは、研修生が自らの日本語能力を伸ばすだけではなく、日本人学生と共修することによって、広く日本文化や地域のことを学べるコースとなっている。具体的には、全学教育機構が提供する「外国人留学生プログラムのための日本語科目」や日本人学生との共修科目である「インターフェース」、また自分の興味に応じた授業を、佐賀大学の各学部提供科目のなかから選んで履修することができる。これは平成25年度の改革によるもので、これにより、幅広い専門をもった学生が、自分の興味関心に応じた科目を履修することができるようになった。

下記の単位を修得すると、修了時に、佐賀大学から修了証が授与される。

区　　分		授業科目名	単位数	修了要件
教養教育科目	外国人留学生プログラムのための授業科目			選択必修 ６単位以上修得すること
	インターフェース科目			選択必修 ２単位以上修得すること
学部間共通教育科目	留学生プログラム教育科目	日本事情研修Ａ 日本事情研修Ｃ	2 2	選択必修 ２単位以上修得すること
		日本事情研修Ｂ 日本事情研修Ｄ	2 2	選択必修 ２単位以上修得すること
全学教育機構が開設する授業科目				選択必修 ６単位以上修得すること
各学部が開設する授業科目				
計				18単位以上

■コーディネーター

中山　亜紀子　准教授（全学教育機構）　　布尾　勝一郎　准教授（全学教育機構）

■開講期間

平成27年10月～平成28年８月

■実施概要

平成28年度は、27年度後期から在籍していた王立プノンペン大学（カンボジア）、サンパウロ大学（ブラジル）、アザディ世界言語大学（トルクメニスタン）、ベオグラード大学（セルビア）各１人ずつ、合計４人の研修生が佐賀大学で学んだ。４人とも、自分の留学目的や興味に応じた授業を履修し、インターフェース科目にも積極的に参加し、無事に修了した。さらに、サンパウロ大学からの学生は、日本の労働組合について日研生レポートを作成した。彼らの前途が洋々としていることを望みたい。

平成28年度後期からは、ラオス国立大学（ラオス）からの日研生を１人受け入れた。受け入れ学部は、教育学部である。現在は、日本語の能力を伸ばしつつ、日本人学生との共修授業に参加し、日研生レポートのための準備にとりかかるなど、積極的に活動し、日本社会への理解を深めている。また、SPACE-J の日本事情研修を履修し、日本語を使って留学生同士、あるいは日本人学生との交流を図っている。

平成27年度日本語・日本文化研修コース受講生（平成27年10月～平成28年８月）

国名	性別	受入学部	大学名	推薦枠
ブラジル	女	文化教育学部	サンパウロ総合大学	大使館
セルビア	女	文化教育学部	ベオグラード大学	大使館
カンボジア	男	文化教育学部	王立プノンペン大学	大学
トルクメニスタン	男	経済学部	アザディ世界言語大学	大使館

平成28年度日本語・日本文化研修コース受講生（平成28年10月～平成29年８月）

国名	性別	受入学部	大学名	推薦枠
ラオス	男	教育学部	ラオス国立大学	大学

１．４　平成28年度日本語研修コース

■コース概要

外国人留学生の大学院入学前予備教育として、日本語研修コースを開設した。主に国費外国人留学生のためのコースであるが、私費留学生についても参加を認めている。日本語初級前半・初級後半・初中級までの３レベルを設定し、参加学生はプレースメント・テストによってどのレベルに該当するか判断される。各レベル、一週間に８～10コマの日本語授業が開講され、研修コース参加者は原則当該レベルの全ての日本語授業を受講し、全ての授業科目を修了すればコース修了となる。

平成28年度前学期は１人､後学期は３人から本コースへの申し込みがあったが､いずれの学生も修了はしなかった。理由は成績不振で、特に漢字の授業で合格点を取ることができていない。漢字学習を諦めて途中で授業に来なくなったことも考えられ、非漢字圏学習者の漢字学習継続への対応が必要である。

■コーディネーター

吉川　達（全学教育機構）

■日本語研修コース参加学生

平成28年４月～平成28年８月

国名	所属研究科	区分	レベル
チュニジア	工学系研究科	国費	初級前半レベル

平成28年10月～平成29年２月

国名	所属研究科	区分	レベル
南スーダン	工学系研究科	私費	初級前半レベル
ナイジェリア	工学系研究科	私費	初級前半レベル

１．５　Saga University Summer Program (SUSP)2016

平成28年７月４日から７月22日にかけて、佐賀大学サマープログラム（Saga University Summer Program2016 －Innovation for Sustainability in Young Leaders－）を実施した。今年で４回目の実施となった本プログラムには、タイ、カンボジア、台湾、オーストラリア、カナダの５つの協定校より、８つの国籍の17人の留学生が参加した。また16人の佐賀大学生が留学生の言語・生活サポート等のお世話を行うバディとして留学生を支援し、佐賀市他地域の方々と協働し本プログラムに取り組んだ。

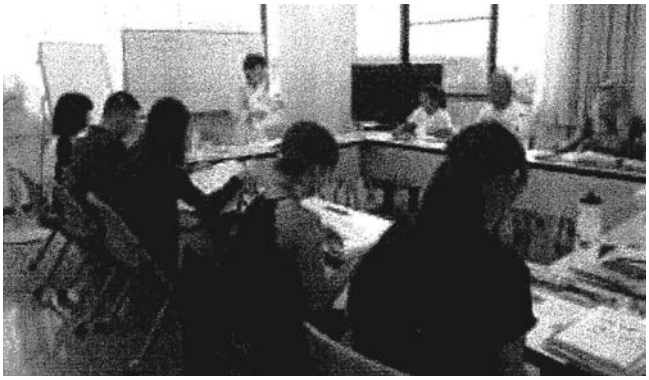
【日本語】
講義「日本語」１～10
200時間（入門・初級）
【講義】
「海洋エネルギー・OTEC」（海洋エネルギー研究センター）
【ワークショップ】
「映像・アニメーション」（中村研究室）
「有田・日本文化」（KAKEHASHI－PJ）
【地域学習】
「佐賀市文化学習」（佐賀市コンベンション推進室）
「佐賀市歴史学習」（徴古館等）
「国際協力」（JICA 北九州市）

「アニメーション」（北九州漫画ミュージアム・北九州市）
「エコプラザ・バイオマス施設」（佐賀市）
「鹿島の自然とミニガタリンピック体験」
「有田焼の歴史」（有田まちづくり公社）
【振り返り】
グループワーク・グループプレゼンテーション

今回は日本語の授業を導入し、質の高い日本語授業を提供しつつ、従来の本学のもつ研究・教育を参加留学生に提供した。さらに、地域の自治体等と協力し、佐賀の歴史・文化・自然・環境を学ぶ機会を提供し、本学及び本学が立地する地域への理解を深めた。また、日本語を学ぶことで、これらのプログラムの理解度が進み、ホームステイでも、日本の家族と積極的に交流することができた。

最終日のプレゼンテーションでは、３週間実施したプログラムで学んだ他分野のテーマを振り返りつつ、各人の将来について報告した。参加留学生は佐賀大学の特色ある研究や教育、地域の企業や自治体の取組み、日本の国際協力などを学んだことで、更なる関心を高め、今後の学習に役立つものになった。またサマープログラムを通して、海外協定校とのさらなる交流の促進と本学学生の国際性の醸成につながることが期待される。

開講式


日本語クラス１

１．６　香港中文大学学生交流プログラム（短期受入れ）

香港中文大学サマープログラム

■実施期間】
平成28年７月３日～７月12日（10日間）

■参加学生
香港中文大学生10人、佐賀大学生10人

■担当教員
吉川　達　講師（全学教育機構）山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■概要

７月３日から12日まで香港中文大学の学生10人を受け入れ、サマープログラムを実施した。昨年度からの変更点は、以下の４点である。

・佐賀大学生による佐賀の歴史、文化体験紹介の実施
・武雄高校との交流を香港単独から SUSP との合同に変更
・合宿での宿泊地を三瀬の山びこ交流館に変更
・修了式を送別会内に実施

佐賀大学生による佐賀の歴史、文化紹介では、書道のパフォーマンス、英語での有田焼のプレゼンテーション、茶道部によるお茶の御手前披露が行われた。留学経験者を中心とする佐賀大学生がよく準備してくれていたこともあり、内容の深い活動であった。武雄高校との交流は昨年度香港プログラムだけで行っていたが、本年度は SUSP も合同で行った。総勢26人での訪問となったが、21人の武雄高校の学生さんに迎えられ、交流会、七夕飾り、掃除体験、市内見学、部活見学と充実した活動が行われた。週末の合宿では、宿泊地を山びこ交流館に変更し、夕食、朝食作りを学生たちが行った。スペースが限られているため、ゆっくりと落ち着ける状況ではなかったが、山の中での活動はビル群の中に暮らす香港の学生にとって新鮮な経験であった。修了式はこれまで最終日の午後、自主課題調査発表後行っていたが、授業時間と重なるため、参加できる佐賀大学生が少なかった。そのため､全員が参加する送別会にて修了式も併せて行うようにし､滝澤理事からの修了証授与も送別会会場にて行った。プログラム中、なかなか全員が揃うことがなかったので、全員が参加する修了式・送別会は派遣・受入を通した１年のプログラムの最後を締めくくるのに、意味のあるものであった。

その他の活動は前年度を踏襲したが、ミニガタリンピックなど、活動によっては香港の学生が参加を躊躇するようなものもあったので、香港中文大学の担当者の意見を聞きながら今後活動内容を再度検討する。

■自主課題調査テーマ

グループ①　佐賀の名物
グループ②　佐賀の菓子
グループ③　Festivals of Japan and Hong Kong-
specifically focus on Saga's festivals
グループ④　Tea in China and Japan, Saga
グループ⑤　有田焼

佐大生による文化紹介

三瀬での活動

１．７　留学生交流支援事業

１．７．１　短期留学生受入支援事業

（１）平成28年度佐賀大学短期留学生受入支援事業（申請４件中４件採択）

No	プログラム名	申請者	申請者所属・職	受入学生交流大学・機関名（出身国）	支援人数	対象学生	研修期間	助成額
1	佐賀大学経済学部国際教育交流事業	サーリヤ ディ シルバ	経済学部・教授	ペラデニア大学（スリランカ）	5	学部･大学院生	５日間	420,815円
2	アジアにおける持続的農業生産のため農学教育フォーラム	鄭　紹輝	農学部・教授	スリウィジャヤ大学 Jenderal Soedirman University（インドネシア）	4	農学部・自然科学部	４日間	173,620円
3	日韓連携による農業版MOT教育の国際化プログラム	五十嵐　勉	全学教育機構・農学研究科教授	忠北大学校・国立韓国農水産大学・農協大学（韓国）	5	農学系学部	５日間	140,247円
4	低平地における持続可能な社会形成に向けた環境およびインフラ整備・管理技術の研修	三島悠一郎	工学系研究科・講師	カントー大学・工学部（ベトナム）	5	工学部土木工学科２．３年	７日間	274,370円
合計								1,009,052円

【採択プログラムの成果報告】

１．サーリヤ・ディ・シルバ　教授（経済学部）「佐賀大学経済学部国際教育交流事業」

本プログラムの特色は、講義とフィールド調査を実施し、学生が相互の関係性を理解しやすいよう、内容上のリンクにも配慮している点にある。大学、JA さが、佐賀県農業試験研究センターで、佐賀の農業や技術、営農等について学び、佐賀特産のレンコン・玉ねぎ・イチゴ等の生産農家や道の駅、直売所では、直接経済的な話を聞くことができ、大学だけではなく、地域と学生が一緒になって相互の理解を深め、プログラムを有意義に達成した。参加した留学生は、パラデニア大学農学部の学部・大学院の学生で、スリランカの農業教育・研究に加え、現地の農村での指導・政策立案においても高い評価を得ており、帰国後の彼らの活躍が、国の発展に大事であり、十分に期待できる。一方、佐賀大学生は、経済学部の学生で、佐賀およびアジアの農業について経済的な視野から見識を広めることができた。また、国際交流実習の経験者が多かったため、学識高い留学生と国際交流に関心がある佐賀大学生とが一緒に学んだことによって、留学を視野に入れた今後の学生生活への影響が期待でき、将来につながる交流になった。農家、道の駅等の地域の訪問先や、ホームスティ家族など地域住民との交流で、留学生は佐賀に来なければわからなかった、歴史的、社会的、文化的なさまざまなことを経験し、留学生から次の３つのことが報告された。

①日本人は住んでいる地域（国）を愛している　②そのために決まり事、伝統を守る　③年齢や性別、社会的地位などの立場の分け隔てなく、みんな仲良し平等である。このことは、今回の成果として評価される。

２．鄭　紹輝　教授（農学部）「アジアにおける持続的農業生産のため農学教育フォーラム」

４人の留学生はともに始めての外国体験であり、日本に対するあらゆる面で好奇心が非常に強く、授業や実験体験、見学には興味深く取り組んでいた姿が印象的でした。また、日本人学生との交流ファーラムのためには周到なプレゼンテーションを準備し丁寧に英語で説明された。さらに、参加した日本人学生も普段とは見違えるほど交流に積極的であり、片言でも英語で交流しようとする姿勢がみられた。留学生全員は将来できれば日本へ留学したいと考え、うち１人はさっそく来年度の SPACE プログラムに申し込みたいと表明した。

3．五十嵐　勉　教授（全学教育機構）「日韓連携による農業版 MOT 教育の国際化プログラム」

下記の成果が特筆される。

①高度な農業技術経営管理士の人材育成に関わる日韓５大学の連携協定の実質化に寄与できた。

②国立農水産大学の２人が次年度の当大学の長期海外研修で、農業版 MOT 修了生で組織する農学部アグルマイスターの会の会員農家で10ヶ月の長期研修を実施することに繋がった。

③次年度の本学の農業版 MOT 受講生（院生・社会人）による韓国研修の受け入れで、忠北大学・農水産大学・農協大学が全面的な協力を得ることとなり、学生の相互派遣体制が構築された。

4．三島　悠一郎　講師（工学系研究科）「低平地における持続可能な社会形成に向けた環境及びインフラ整備・管理技術の研修」

本プログラムは JST のさくらサイエンスプランの一部として開催し、ASEAN 諸国ならびにインドから11人の学生（内１人は引率教員）が参加した。二国間ではなく多国間の学生が交わることで、こちらが発信した情報を受け取るだけでなく、各国の状況、技術的課題など、広く情報交換、議論できる場を提供できたことは特筆すべき成果と言える。平成28年度に申請した世界展開力強化事業の申請書では、ASEAN 諸国の大学を主体とした教育の枠組みについて言及しており、今回のプログラムはその思想に基づいて実施されている。大学の国際化に向けて世界展開力強化事業へ再度申請する場合には、本取り組みが重要な実績の一つとして計画の基礎となることが期待される。

1．7．2　特別聴講生・特別研究学生等　学習奨励費支援事業

（２）平成28年度佐賀大学特別聴講学生・特別研究学生等学習奨励費支援事業（採択６件）

No	申請者	プログラム名	国名	出身大学	留学期間
1	Mariani	SPACE−E	インドネシア	ブラウィジャヤ大学	１学期間
2	Kosonen Niko Tapani	SPACE−E	フィンランド	ユバスキュラ大学	１学期間
3	Lukluatun Niswah	SPACE−E	インドネシア	ボゴール農業大学	１学期間
4	Kajai Chayanon	SPACE−E	タイ	モンクット王ラカバン工科大学	１年間
5	Liyanage Dedunu Indika De Silva	特別研究学生	スリランカ	ペラデニア大学	１年間
6	Nisanshala Kumari W Weerasooriya	特別研究学生	スリランカ	ペラデニア大学	１年間

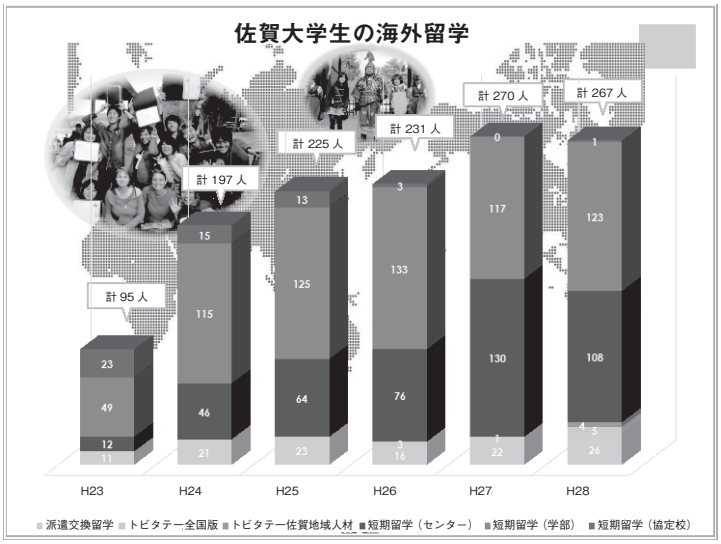
2．学生の海外派遣

2．1　本学学生の海外派遣概況

本学の国際交流推進センターが平成23年10月に設置された当時、大学による学生派遣の人数は95人であった。それから平成28年までの５年間で年間270人の学生が海外で学習する機会を得られるようになった。しかし増加の伸びは鈍化しており、平成28年度の派遣数は前年度とほぼ変わらなかった。これは国際交流推進センターが実施する短期研修プログラムによる派遣が20人程度減少したことに起因する。全年度は外務省の事業「対日理解促進交流プログラム」に採択され、多くの学生が憧れる米国ニューヨークへの短期研修を学生の経済的負担なく23人を派遣したことが短期留学参加者数の伸びに大きく貢献した。

一方、３ヶ月以上の留学をする学生は23人から31人へと増加している。交換留学参加者の伸びに加え、平成28

年度トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム地域人材コースに採択・創設された「世界とともに発展する SAGAN グローバル人材育成事業」による学生派遣が開始され、初年度である平成28年は４人を派遣した。トビタテ全国版にも５人の学生が派遣された。これまで多くの学生が就職活動への支障や卒業時期の遅れなどに対する不安や経済的な負担への懸念を抱き、３ヶ月以上の留学に対して消極的であった。新たな奨学金の創設、指導教員を含む教職員の支援、短期プログラムの拡充による留学志向の強化、学内の留学や国際交流に関心を持つ学生コミュニティの可視化などが、物理的・精神的なハードルを少しずつ下げてきている。



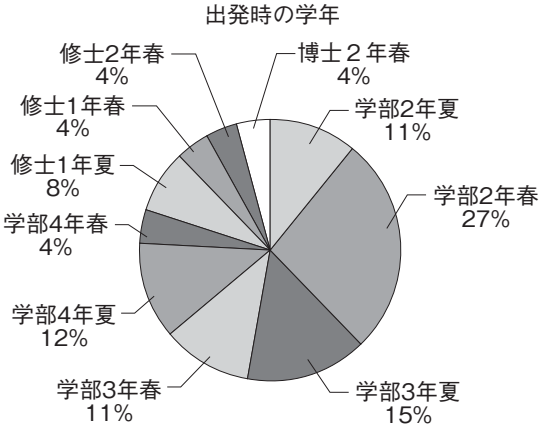
２．２　交換留学生の派遣

平成28年度は10ヶ国・地域の14の協定校に26人の学生を派遣した。前年度より４人増加した。中国・台湾・韓国への留学が14人、欧米・オセアニアへは12人となっており、極端に欧米圏へ集中していない。新たな傾向として挙げられるのが、研究を目的とした交換留学を行う大学院生の増加である。平成28年度は教育学研究科から１人、工学系研究科より４人の大学院生が、３ヶ月から半年間の研究留学を実現した。国際交流推進センター設置後、５年間で108人の学生が交換留学制度を利用した。

■平成24年～28年の交換留学派遣実績

国名	派遣先大学	H24	H25	H26	H27	H28	５年間の累計
アメリカ	スリッパリーロック大学	2	2	2	2	3	11
	パシフィック大学	1	2	1	1	1	6
カナダ	ウィルフリッドロリエ大学	0	2	1	0	0	3
	マニトバ大学	0	0	0	0	1	1
イギリス	イーストアングリア大学	0	0	0	0	1	1
フランス	オルレアン大学	2	1	0	1	0	4
	ブルゴーニュ大学	1	1	1	1	0	4
ドイツ	ドレスデン工科大学	0	0	0	0	2	2
リトアニア	ヴィータウタス・マグヌス大学	0	1	1	1	2	5
フィンランド	ユバスキュラ大学	0	1	1	1	1	4
中国	北京工業大学	4	2	0	3	6	15
	浙江理工大学	0	1	1	0	0	2
	華東師範大学	1	0	0	0	0	1
韓国	国民大学校	2	2	1	4	4	13
	大邱大学校	0	0	1	0	1	2

韓国	培材大学校	0	0	0	0	1	1
	釜山大学校	1	0	0	0	0	1
	釜慶大学校	0	1	0	0	0	1
	全南大学校	2	0	0	0	1	3
台湾	国立政治大学	0	2	2	2	1	7
	国立中興大学	0	0	0	1	0	1
ベトナム	ハノイ国家大学外国語大学	1	0	0	0	0	1
タイ	タマサート大学	0	0	1	2	0	3
	カセサート大学	0	0	1	0	0	1
	チェンマイ大学	0	1	0	0	0	1
スリランカ	ペラデニア大学	2	1	1	0	0	4
オーストラリア	ラトローブ大学	0	1	0	1	0	2
	シドニー工科大学	2	2	1	2	1	8
	計	21	23	16	22	26	108



交換留学開始時の学年を見ると、学部２年時に出発する学生が全体の38％（10人）を占めており、留学出発時期の早期化が進んでいる。またもう一つの特徴としては、学部２年生で交換留学を開始した学生全員が大学実施の海外短期研修に参加しているという点である。交換留学前に短期研修に参加するという傾向は学部２年生に限ったことではなく、全派遣学生26人中23人が大学実施の海外短期研修に参加しており、短期研修が交換留学の動機付けとなっていることがわかる。交換留学を希望する学生が、留学への意欲を持続させ、家族や指導教員、部活の友人など周囲の人間を説得したり、語学の条件満たすなど、ハードルを一つ一つクリアし、留学を実現させるためには、入学後のなるべく早い時期に学内外のプログラムを通して異文化や海外へ関心を高め、語学の学習や大学選びなど留学準備を早期に始められるか否かが鍵である。大学は留学情報の効果的な発信、留学先の多様化、短期プログラムや共修授業の参加による動機づけ、経済的支援、学生コミュニティづくりなど包括的な支援を行うことが重要であると思われる。

■平成28年度に本学から派遣された交換学生（10ヶ国・地域　14大学　26人）

派遣国	派遣先大学名	氏名	所属	派遣時の学年	派遣期間	奨学金
アメリカ	スリッパリーロック大学	生津　薫奈	経済学部	2	平成28年８月～平成29年５月	業務スーパードリーム奨学金
		小林　真夕	文化教育学部	2	平成28年８月～平成29年５月	校友会
		三苫　詩歩	文化教育学部	3	平成28年８月～平成29年５月	業務スーパードリーム奨学金
	パシフィック大学	上野　明音	文化教育学部	4	平成29年１月～平成29年12月	校友会
カナダ	マニトバ大学	河野　翔太	教育学研究科	2	平成29年１月～平成29年６月	業務スーパードリーム奨学金
イギリス	イーストアングリア大学	中村　駿介	工学系研究科	1	平成28年11月～平成28年１月	校友会
ドイツ	ドレスデン工科大学	黒岩　春乃	工学系研究科	1	平成28年10月～平成29年２月	Erasmus+
		郡　　大心	工学系研究科	2	平成28年12月～平成29年２月	Erasmus+
フィンランド	ユバスキュラ大学	三好　貴也	文化教育学部	3	平成29年１月～平成29年６月	トビタテ
リトアニア	ヴィータウタス･マグヌス大学	チェ　インウ	理工学部	3	平成29年１月～平成29年12月	校友会
		溝上宗史朗	文化教育学部	4	平成28年８月～平成29年５月	校友会
オーストラリア	シドニー工科大学	劉　　彦君	経済学部	3	平成29年３月～平成29年11月	校友会
中国	北京工業大学	伊藤ひかり	文化教育学部	2	平成29年２月～平成30年１月	JASSO
		茶園　悟大	文化教育学部	2	平成29年２月～平成30年１月	JASSO
		中野　優歩	文化教育学部	2	平成29年２月～平成30年１月	JASSO
		諸熊　優帆	文化教育学部	2	平成29年２月～平成30年１月	JASSO
		吉田　知加	文化教育学部	3	平成28年９月～平成29年６月	JASSO
		袁　　月	経済学部	4	平成28年９月～平成29年１月	JASSO
韓国	国民大学校	藤瀬　千笑	経済学部	2	平成29年３月～平成29年12月	JASSO
		脇山　裕子	文化教育学部	2	平成29年３月～平成29年12月	JASSO
		森永なぎさ	経済学部	3	平成28年９月～平成29年６月	校友会
		北原　茉莉	文化教育学部	3	平成28年９月～平成28年12月	佐賀大学奨励金
	全南大学校	市川　楓子	理工学部	2	平成28年９月～平成28年12月	GKS 奨学金
	大邱大学校	諸藤　有紀	工学系研究科	1	平成28年９月～平成28年12月	JASSO
	培材大学校	鶴　　涼菜	経済学部	2	平成29年３月～平成29年12月	JASSO
台湾	国立政治大学	田村　駿太	文化教育学部	4	平成28年８月～平成29年１月	業務スーパードリーム奨学金

佐賀大学奨励費：佐賀大学学生海外派遣奨励金（１年間30万円、１月期間15万円（一時金））
校友会：佐賀大学校友会海外派遣奨励金（１年間30万円、１学期間15万円（一時金））
JASSO：JASSO 海外留学支援制度（韓国７万円、中国６万円（月額））
業務スーパードリーム奨学金（民間）（15万円（月額））
Erasmus+：EU（800ユーロ（月額）・1,000ユーロ（渡航費））
GKS 奨学金：（50万ウォン（月額）・100万ウォン（支度金））

経済的支援については、JASSO の海外留学支援制度の採択、民間奨学金応募への支援、本学校友会による奨励金支給等によって、平成28年度は前年度に続き、奨学金受給率が100％となった。奨学金採択状況は以下に示す通りである。

H28年度交換留学生が受給した奨学金

奨学金の種類	件数
トビタテ留学 JAPAN	1
JASSO	11
本学独自の奨学金	7
外国政府（韓国）	1
ERASMUS+	2
民間財団	4
計	26

2．3　トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラムによる海外派遣

「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」は平成26年度に開始した官民協働で取り組む海外留学支援制度で、希望学生は大学を通じて申請を行う。海外協定校が提供する教育プログラムに参加する交換留学とは異なり、留学先は大学に限定されず、また現地での学習や実践活動を自ら計画しなければならない。独創的な留学計画を立てられるが、アイディアを計画書という形にする作業に苦労する学生多い。自主性や積極性だけでなく、インターパーソナルコミュニケーションや問題解決能力などが計画書作成時にすでに求められている。本学では、第１期に３人の学生が採択され、インド・ケニア、インドネシア、ミャンマーへの留学を実現させた。平成28年度は18件の応募に対し９件が採択となり、諸外国にてそれぞれの目的に応じた実践的な学修活動に従事した。

■平成28年度の派遣留学生（計９件）

名前	学部・研究科	専攻	学年	派遣先国	コース	活動内容
木原　大輔	工学系研究科 博士前期課程	電気電子工学専攻	M２	ドイツ	理系、複合・融合系人材	加速器に関する国際共同研究
三好　貴也	文化教育学部	学校教育課程	4	フィンランド	多様性人材	教育実習
白井　青海	農学部	生命機能科学科	4	スリランカ	地域人材	化粧品原料の研究
金沢　昂紀	経済学部	経済学科	4	フィリピン	地域人材	国際観光インターン
力久　哲郎	医学部	医学科	3	ミャンマー	新興国	国際保健医療インターンシップ
小島　翔太	文化教育学部	人間環境課程	3	カンボジア	新興国	Football Club インターン
古賀さくら	医学部	医学科	3	スウェーデン	多様性人材	予防医療 PBL
井上　賢生	理工学部	都市工学科	3	インド	地域人材	IT 企業インターン
堀池　理央	経済学部	経営学科	3	カナダ	地域人材	佐賀県をアニメでアピール

２．４　Saga University Study Abroad Program (SUSAP)

SUSAP は外国語の運用能力を高めるだけでなく、海外協定校等での講義や現地学生・海外からの留学生との共同活動や意見交換、一般市民との交流を通して、現地の社会や文化、生活習慣を学び、多様な文化や価値観を理解するとともに、国際的な視野を育むことを目指している。平成28年度に実施したプログラムは以下の表の通りである。国際交流推進センター設置以降、最多となる14プログラムを実施し、８ヶ国12大学に108人を派遣した。奨学金を受給した学生は102人（94％）であった。

■平成28年度実施のプログラム

SUSAP 2016 Summer	国・地域	期間	人数
大邱大学校	韓国	３週間	8
浙江科技学院	中国	２週間	7
カーティン大学	シンガポール	１ヶ月	12
ウィルフリッドロリエ大学	カナダ	３週間	10
国立中興大学	台湾	２週間	4
ガジャマダ大学	インドネシア	３週間	5
輔仁カトリック大学	台湾	10日間	5
計			51

SUSAP 2017 Spring	国	期間	人数
カーティン大学	シンガポール	１ヶ月	11
シドニー工科大学	オーストラリア	１ヶ月	11
国立東華大学	台湾	１ヶ月	4
香港中文大学	中国	10日間	10
浙江理工大学	中国	１ヶ月	3
大邱大学校	韓国	１ヶ月	6
ヴィータウタス･マグヌス大学	リトアニア	２週間	12
計			57

これらのプログラムは、異文化接触や海外渡航経験の少ない学部１～２年生を対象とした導入プログラムから、英語で専門科目を履修する高度なものまで、学生個々の学習進度、語学力、関心、キャリアプラン等にあわせて選択できるようにしている。参加者の傾向としては、派遣学生の68％が女子学生であった。大半を占めるものの、前年度より男子学生の参加が１割増加した。学年別では、学部１～２年生の参加が全体の85％（H27年度75％）を占めている。３年生はインターンシップ、４年生は就職活動があり、学部１～２年生の時期が短期留学に参加しやすい時期であると思われる。以下に平成28年度に国際交流推進センターが実施した14のプログラムの概要を紹介する。

２．４．１　大邱大学校プログラム（韓国）

■概　要

大邱大学校への学生派遣は今年で４回目となった。海外協定校の学生を対象として毎年開催されるサマープログラムで、韓国語の授業と韓国文化体験、大邱近郊へのスタディートリップ等の機会が提供される。例年同様の

傾向であるが、参加者全員が女子学生となった。本プログラムでは、学生はプレースメントテストを受け、その結果によりレベル分けされた韓国語クラスに毎日３時間ほど参加する。韓国人の先生から韓国語のみで韓国語を学ぶという体験は非常に楽しいものであると学生は話している。特筆すべきは、本プログラムを経て韓国への交換留学を実現させた学生が多数出ているという点である。大邱大学校での学習や交流は、単に韓国社会・文化への導入としてだけでなく、長期留学への動機付けを促すものとなっていると言える。派遣学生は大邱大学校により授業料が免除された。

■**担当教員**　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■**実施期間**　平成28年８月７日～27日（20日間）

■**単位付与**　国際交流実習（基本教養科目）２単位

■**参加学生**　８人

学部・研究科	学　年	人　数
医学部	３年	1
経済学部	２年	3
農学部	２年	1
経済学部	１年	1
農学部	１年	1
教育学部	１年	1

２．４．２　浙江科技学院（中国）

■**概　要**

中国杭州にある協定校の一つ、浙江科技学院が毎年実施するサマープログラムへの派遣である。平成28年度は参加者全員（７人）が文化教育学部国際文化課程の２年生であり、中国語の学習経験があった。本プログラムは主に浙江科技学院の重点地国であるドイツの学生を主な対象としていることから、中国留学であるものの、プログラムのコミュニケーション言語は英語となった。ドイツ人学生と共に中国語、中国文化の講義、文化体験や視察など様々な活動に参加した。最終週の３日間はプログラムの一環として、上海旅行が組み込まれており、経済的発展が著しい上海と歴史と文化溢れる杭州とを比較しながら中国社会に多面的に理解する機会となった。本学から派遣した学生は中国語や中国文化に関心が強く、中国語既習者であることからか、出発前は中国社会にどっぷり浸かるぞという意気込みを皆持っていた。しかし、プログラムの仲間はヨーロッパ人学生で、中国人学生・教職員とも英語で折衝しなければならいということで、ストレスを訴える学生もいた。しかしこの悔しい経験がバネとなり、短期研修の半年後に参加者の中から３人が中国への交換留学を実現させた。本プログラムに参加した全学生が浙江科技学院により授業料の免除を受け、本学が寮費及び上海宿泊費を助成した。

■**担当教員**　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■**実施期間**　平成28年８月６日～22日（２週間）

■**単位付与**　なし

■**参加学生**　７人

学部・研究科	学　年	人　数
文化教育学部	２年	7

２．４．３　国立中興大学プログラム（台湾）

■概　要

本プログラムは台湾の国立中興大学が協定校の学生を対象として実施するサマープログラムである。本学からの派遣学生は４人となった。様々な国の学生が参加し、多様性に富んだプログラムである。本プログラムでは、設定されたテーマに関して英語で講義が行われる。また台湾文化が体験できる活動やフィールドトリップなどに参加する。講義のテーマは毎年異なり、今年は「国際社会における持続可能な開発のための教育」とされ、オーストリア人講師による講義を毎日３時間受講した。本学学生は他国の学生が非常に積極的に授業に参加する姿を見て大いに刺激を受けたようである。また自身の英語によるリスニング力、ディスカッション能力が不十分であると痛感し、帰国後の英語学習のモチベーションになったと話している。このような経験は自分自身の関心、能力、資質などを客観的にとらえ、相対化する機会となっている。本プログラムは中興大学により、３人分の授業料が免除され、１人は本学からは授業料相当を助成した。

■担当教員　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■実施期間　平成28年８月９日～23日（２週間）

■単位付与　なし

■参加学生　４人

学部・研究科	学　年	人　数
文化教育学部	４年	1
文化教育学部	２年	1
農学部	１年	2

２．４．４　輔仁カトリック大学プログラム（台湾）

■概　要

今年度初めての実施となった本プログラムは、台湾の私立大学・輔仁カトリック大学の協力により、本学学生のみを対象とした現地学生との共修プログラムを提供していただいたものである。プログラムは中国語の授業、日台学生の共同フィールドワーク、佐賀大学・輔仁大学の双方の学生によるプレゼンテーション、フィールドワークの成果報告により構成された。そのほか、現在輔仁大学に留学中の日本人学生との意見交換会や国立政治大学へのフィールドトリップなども実施した。日台合同でのフィールドワークでは、日本人１人に台湾人学生が２人つき、グループで調査トピックに関係する場所へ出かけ、小規模の調査を行なった。台湾人学生は日本語学科の学生であり、日本に強い関心を持っていることから、フィールドワークでは台湾の交通網、観光業、パワースポットなど調べながらも、日本の現状について本学学生に様々質問してくれたため、日台の比較しながら活動をすることができた。本プログラムは輔仁大学により授業料が免除され、本学が現地宿泊費と視察費用を助成した。

■担当教員　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■実施期間　平成28年８月30日～９月７日（９週間）

■単位付与　なし

■参加学生　５人

学部・研究科	学　年	人　数
経済学部	２年	3
芸術地域デザイン学部	１年	2

2．4．5　カーティン大学プログラム（シンガポール）

■概　要

シンガポールのカーティン大学への派遣は今回で４回目となった。今回は12人を派遣した。例年女子学生の参加が大半を占めるが、今年度は男女の比率が半々であった。本学から派遣された学生は、カーティン大学の附設英語学校において、アジアの様々な国の学生とともに「聞く・話す」を重点的にトレーニングする英語コースに参加した。カーティン大学は１日４時間の授業の後、午後３時まで教員が常駐する教室で宿題や予習・復習などを行う自主学習の時間を設定しており、時間数の面でも教育指導の面でも非常に手厚いところが特徴である。また多民族の都市社会であるシンガポールは､佐賀と異なる面が多く､現地での生活そのものが有意義な学びとなった。佐賀ではあまり接触する機会のなかった東南アジア各地の若者と授業内外で交流したり、ゲストハウスで佐賀大生の仲間と共同生活をしたことなども、コミュニケーション能力や環境への適応能力などを養う機会となったと考える。本プログラムに参加した学生のうち７人が佐賀大学より寮費（約７万円）の助成を受けた。

■担当教員　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■実施期間　平成28年８月７日～９月４日（１ヶ月間）

■単位付与　国際交流実習（基本教養科目）２単位

■参加学生　12人

学部・研究科	学　年	人　数
工学系研究科	Ｍ１年	1
理工学部	４年	1
経済学部	２年	3
理工学部	２年	1
経済学部	１年	1
農学部	１年	3
教育学部	１年	1
理工学部	１年	1

2．4．6　LEAF プログラム（カナダ）

■概　要

前年度に続き、２年目の実施となるカナダの協定校ウィルフリッドロリエ大学の LEAF Business English Program へ学生を10人派遣した。本プログラムでは、単に英語を学ぶものではなく、北米のビジネス文化について様々な国籍の学生とのディスカッションやグループワーク、プレゼンテーションを通して学ぶものである。本プログラムは本来１ヶ月のプログラムであるが、本学の学生は学期末試験のため２週間遅れで合流している。そのため前半２週間分の研修内容を各自が自学で補わなければならない。またプログラムは参加学生に自分の考えを発言すること強く求められるため、多くの学生が緊張感を絶えず感じながらの参加となった。ウィルフリッドロリエ大学は本プログラムの学習成果を高めるため、世界各地から学生を集め、民族的バックグラウンド、言語的バックグランドを精査し、クラス環境の多様性を保っている。その背景には、グローバル社会でビジネスを行う際、プロジェクトを成功させるためには、多様なチームメンバーの間に存在する様々な差異を乗り越えなければならないということを念頭に置いた実践トレーニングを行うためである。多様な国の出身者と仲間になり、協力してグループワークを遂行する経験は大変貴重な学びであり、グローバル社会で活躍するために必要な能力や資質を養う機会となったと考える｡佐賀大学は､本プログラムに参加した学生のうち９人に奨学金８万円を支給した。

■**担当教員**　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）
■**実施期間**　平成28年８月６日～24日（18日間）
■**単位付与**　なし
■**参加学生**　10人

学部・研究科	学　年	人　数
医学部	４年	1
理工学部	３年	1
経済学部	３年	1
理工学部	２年	1
経済学部	２年	1
文化教育学部	２年	2
農学部	１年	1
理工学部	１年	1
教育学部	１年	1

２．４．７　ガジャマダ大学 DREaM プログラム（インドネシア）

■**概　要**

本年度初めて学生をインドネシアの協定校ガジャマダ大学に派遣することになった。本プログラムは、ガジャマダ大学が毎年夏に協定校の学生を主な対象として実施しているサマープログラムである。毎年、異なるテーマが設定され、本年度は“Managing The Blue Planet−Ocean and Coastal Zone Management for Security, Prosperity and Peace”というテーマであった。ガジャマダ大学の教員に海外からの招聘教員も加わり、内容の濃い講義が英語で提供される。またプログラムの最大の魅力となっているのが、提供される多様なアクティブラーニングの機会である。テーマに関連する問題を解決するためのアクションプランをグループで作成したり、村落での家内工業を支援するインターンシップやコミュニティサービス、さらには農家での３泊４日のホームステイにも参加する。地球規模で発生している問題を解決するには言語や文化の違いを乗り越え、学際的な手法で問題を分析し、解決方法を探ることが大切であるということを、期間の短いプログラムであるが十二分に学ぶことができている。本プログラムに参加した学生全員は、本学より現地のプログラム参加費（約７万５千円）の助成を受けた。

■**担当教員**　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）
■**実施期間**　平成28年８月８日～24日（16日間）
■**単位付与**　なし
■**参加学生**　５人

学部・研究科	学　年	人　数
工学系研究科	Ｍ１年	1
農学部	２年	4

２．４．８　香港中文大学プログラム（中国）

■**実施期間**　平成29年２月19日～２月28日（10日間）
■**参加学生**　10人
■**担当教員**　吉川　達　講師（全学教育機構）

■概　要

本プログラムは、本年度で５年目となる。例年通り香港での現地研修の前に４回事前研修を行った。事前研修では、香港の基礎情報の確認、自主課題の設定、スカイプによる香港中文大学生との事前交流、危機管理講習などを行った。佐賀大学生同士も学部を越える交流となった。

香港での現地研修では、主に、香港中文大学生との交流、香港中文大学の授業参加、自主課題調査、博物館等の見学、現地で活躍する日本人との意見交換などを行った。現地では、10人の佐賀大学生が10人の香港中文大学生と交流パートナーとなり、活動を行う。本年度は、確定したパートナーが６人であったが、それ以外の香港中文大学生も、佐賀でのプログラムに参加するかは未定であるが、交流パートナーとして参加した。自主課題調査は、このパートナーの助けを借りながら進め、最終日に香港中文大学の授業で成果を発表した。

香港中文大学生との交流は、交流パートナーの学生が中心であるが、それ以外にも過去のプログラム参加者や、授業見学時に交流した学生など多くの香港中文大学生と交流する機会があった。さまざまな活動を通して、交流パートナーはじめ、多くの香港中文大学生と親密な関係を築いた。また、高校訪問があり、現地の高校生と日本語、英語を交えて交流した。香港の高校生のエネルギッシュな態度に佐賀大学生も対応し、活発な交流となった。

現地での日本人との交流については、前年度からJETRO香港を訪問し、所長から香港における日本企業の状況や海外で働くことの意義等についてご講義をいただいている。同時に同会場にて、香港日本人倶楽部の会長兼商工会議所所長から、香港で生活する日本人の状況、海外での生活についてお話いただいた。お二人とも非常に実になる話しをしてくださり、就職活動を控えた３年生はもとより１、２年生の学生も非常に感化され、会の後は一様に仕事に対する意識が上がっている様子であった。

今年度は、現地プログラム序盤にインフルエンザを発症する学生と途中で体調を崩す学生がおり、２度現地の病院に通院することになったが、香港中文大学のプログラム担当者の完全なサポートで両名とも安心して通院し、快方に向かった。

帰国後、１回の事後研修を経て、プログラムは終了となった。

■単位付与　国際交流実習（基本教養科目）２単位

佐賀大学生参加者

氏　名	学部	学　年
仮屋園智佳	文化教育学部	３年
小林　幸平	文化教育学部	３年
馬場　菜摘	文化教育学部	３年
財津　真弥	経済学部	２年
笹野　万葉	教育学部	１年
寺﨑　文香	教育学部	１年
光野　静夏	経済学部	１年
佐々木麻子	経済学部	１年
笠井　毅士	理工学部	１年
森　　叶葉	理工学部	１年

自主課題調査発表

高校生との交流

2．4．9　カーティン大学プログラム（シンガポール）

■概　要

本年度２回目、通算５回目となるカーティン大学への派遣である。女子学生６人、男子学生５人の計11人が１ヶ月間の英語研修に参加した。「聞く・話す」を重点的にトレーニングすGeneral Englishコースに参加し実践的な学習を行った。英語の学び方・教え方の日本との違いについて特に強い印象を抱いたようである。授業は教員と学生がともにつくるもので、学生の積極的な参加が不可欠であること、また知識として獲得した「英語」をコミュニカティブな英語にする方法が優れていることなどを指摘する学生が多かった。カーティン大学で共に英語を学ぶ学生には、中国人、ベトナム人、インドネシア人などがおり、ペアワークや交流イベントなどを通して友好関係を広げていった。英語学校であるため、同世代のシンガポール人との交わりがほとんどなかった点が残念である。シンガポール社会に暮らすマレー系、インド系、中華系の人々と接触する機会を何らかの方法で提供することで、シンガポールの文化や制度などについての知識や理解につながると考える。今後の課題としたい。本プログラムに参加した全参加者が、本学より寮費（約５万７千円）の助成を受けた。

■担当教員　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■実施期間　平成29年２月18日～３月18日（１ヶ月間）

■単位付与　国際交流実習（基本教養科目）２単位

■参加学生　11人

学部・研究科	学　年	人　数
経済学部	２年	3
農学部	２年	1
理工学部	２年	1
経済学部	１年	1
農学部	１年	1
教育学部	１年	1
理工学部	１年	2
医学部	１年	1

2．4．10　浙江理工大学プログラム（中国）

■概　要

浙江理工大学への派遣は今年で３度目である。前年度は９人の学生を派遣したが、本年度は応募が少なく理系学部３人のみとなった。本プログラムは交換留学生が参加する中国語授業を１ヶ月間参加させてもらうもので、夏に実施されるサマープログラムとは異なり、文化体験や視察などの様々な体験学習の機会が提供されない。そのため、本学が独自にアレンジした活動もある。一つは、中国の大学院に進学した本学卒業生に協力を依頼し、上海での一日研修（企業訪問など）や杭州での佐賀大学同窓生を集めての交流会を実施した。通常の10人程度の学生団体とは異なり、３人の小さなグループであったため、問題に直面した時には周囲の仲間に頼る事があまりできず、主体的に働きかけをしなければならなかった。しかし、小さな問題をいくつも自分らで解決するという経験は、適応力や問題解決能力が向上や自信に繋がったようである。さらには、交流の機会を自ら得るために、現地の日本語学科の先生に掛け合い、授業参加をお願いするなど積極性を発揮していた。語学力向上を目指す学生にとっては集中的に中国語学習に取り組むことができ、中国人教員が中国語のみを使用して展開する授業に参加できる点が大変魅力的であるが、本学では中国語を学ぶ学生が少なくなり、アジアを専門に学ぶ専攻もなくなっ

たことから、理系の学生や中国語を全く学習したことのない学生が参加しやすく魅力的な内容に改善してく必要がある。本プログラムでは、参加学生は浙江理工大学による授業料免除と、本学からの寮費及び上海－杭州の交通費（約２万円）の助成を受けた。

■**担当教員**　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■**実施期間**　平成29年３月２日～４月２日（１ヶ月間）

■**単位付与**　なし

■**参加学生**　３人

学部・研究科	学　年	人　数
理工学部	３年	1
理工学部	１年	1
農学部	１年	1

２．４．11　大邱大学校プログラム（韓国）

■**概　要**

大邱大学校への学生派遣は夏に続き今年２回目、通算５回目の派遣となった。夏のプログラムとは異なり、海外協定校に所属する交換留学生を主な対象とした韓国語の集中授業に参加した。韓国語授業は週５日、１日４時間提供され、初日のレベル分けテストの結果により初級、中級、上級に分けられた。韓国語の授業時間数が多く、滞在期間が１ヶ月間であるため、学生は韓国語能力が上達したと強く実感している。授業にはベトナム人、中国人、ウガンダ人、ルワンダ人など多国籍で、多様な国の出身者が韓国語を使ってコミュニケーションをとることが楽しかったと話す学生も多い。さらに韓国語授業のクラスだけでは接触の機会がない韓国人学生との交流を求め、サークル活動に積極的に参加した学生もいた。参加学生は、本学より大邱大学校の授業料（約５万円）を助成された。

■**担当教員**　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■**実施期間**　平成29年３月５日～４月２日（29日間）

■**単位付与**　国際交流実習（基本教養科目）２単位

■**参加学生**　６人

学部・研究科	学　年	人　数
理工学部	３年	1
文化教育学部	２年	1
経済学部	２年	2
農学部	２年	1
経済学部	１年	1

２．４．12　シドニー工科大学プログラム（オーストラリア）

■**概　要**

昨年度に続き、オーストラリアの協定校であるシドニー工科大学（UTS）のUTS Insearchが実施している英語のコースに11人を派遣した。UTSへは毎年佐賀大学から１人～３人の交換留学生を派遣しており、交換留学生やサマープログラムでの学生受け入れも多く、学生交流の活発な協定校である。UTSではアジア研究を副専攻にする学生が多く、アジアの協定校へ留学が義務付けられている。今回も日本に留学する予定の現地学生にバ

ディを募り、本学学生とマッチングをした。昨年に比べバディの応募が少なかったものの、プログラムの最初の週に開催する交流会で、バディ同士あるいは自分のバディ以外のUTS学生と知り合いになることで１：１の交友関係に限定されない、広がりのある交流が可能となった。UTS Insearchで学ぶ日本人学生が少ないため、クラスの中で日本人が大半を占めることはなく、非常にバランスがとれていた。帰国後の自己評価アンケートの結果では、英語能力や英語学習へのモチベーション向上だけでなく、様々な活動に積極的・主体的に行動することの大切さや、自らの進路の選択肢が増えたと感じる学生が多かった。本プログラムに参加した学生のうち９人が佐賀大学より１人７万円の奨学金を受給した。

■**担当教員**　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■**実施期間**　平成29年２月18日～３月19日（１ヶ月間）

■**単位付与**　国際交流実習（基本教養科目）２単位

■**参加学生**　11人

学部・研究科	学　年	人　数
医学部	３年	1
文化教育学部	２年	2
経済学部	２年	2
農学部	２年	3
理工学部	１年	1
医学部	１年	2

２．４．13　東華大学プログラム（台湾）

■**概　要**

昨年度に開始した台湾・国立東華大学への派遣では、本年度４人参加した。本プログラムは英語により参加学生の専攻分野や関心のある専門外の授業を約１ヶ月間履修するものである。半年や１年間の交換留学に一歩を踏み出せない学生が、１ヶ月間、交換留学と同じ経験を得られるのが本プログラムの特徴である。本学からの参加学生は、人文社会系や理系の専門授業を英語で履修したり、英語のスキルアップを目指す授業に参加したり、さらには中国語の授業を履修するなど、各々の留学の目的や関心に応じて自らの留学中の学習を設計できる。英語による専門科目は、留学生にのみ開放されている授業ではなく、多くの台湾人学生も参加している。本学学生は、台湾人学生が授業の中で留学生と対等に英語でディスカッションをする姿を見たり、寮生活や授業を通して多様な留学生と関わることで、自分自身を見つめ直し、各々が自分の課題を発見したようである。参加者は東華大学より授業料免除を受け、本学より一人当たり４万円の奨学金を受給した。

■**担当教員**　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■**実施期間**　平成29年２月15日～３月18日（１ヶ月間）

■**単位付与**　国際交流実習（基本教養科目）２単位

■**参加学生**　４人

学部・研究科	学　年	人　数
経済学部	４年	1
理工学部	３年	1
理工学部	１年	1
医学部	１年	1

2．4．14　SAGA−VDU プログラム（リトアニア）

■概　要

本プログラムは、リトアニアのヴィータウタス・マグヌス大学と共同で開発し、本年度初めて実施したものである。日本人には馴染みの薄い国であるが、平和や人権などを学び考える場として、リトアニアは非常に優れた環境を提供している。ヴィータウタス・マグヌス大学のアジア研究センターは、以前、日本領事館であった建物に入っており、杉原千畝が多くのユダヤ人に通過ビザを発給した場所でもある。カウナスの街にはユダヤ人捕虜のキャンプやソビエト時代の名残など、此処彼処に日本人学生に考えることを強いる空間が存在する。本プログラムでは、日頃あまり意識をしない平和や人権について学生に考えさせること以外にも目的があった。それは現地の同世代の学生がどのようなキャンパスライフを送り、将来についてどのようなことを考えているのかを、授業参加や交流を通して学ぶということであった。本学学生はリトアニア人学生とともに英語を学習する授業に参加したり、政治学や国際関係の授業を聴講したり、さらには日本に関心のある学生や地域の人々との交流など、毎日多くの活動に参加した。ほとんどの佐賀大学生がリトアニア人の一般家庭でホームステイをする経験も得られた。さらに、ヴィータウタス・マグヌス大学に交換留学をしている日本の様々な地域から来た学生らとの交流からも多くの刺激を得た。本年度初めての実施であったにも関わらず、12人の学生が参加したことから、ヨーロッパに対する関心の高さが感じられた。参加者は本学より授業料と寮費（約５万円）の助成を受けた。

■担当教員　山田　直子　准教授（国際交流推進センター）

■実施期間　平成29年３月12日～27日（２週間）

■単位付与　なし

■参加学生　12人

学部・研究科	学　年	人　数
文化教育学部	２年	1
理工学部	２年	1
農学部	２年	5
医学部	２年	2
教育学部	１年	2
農学部	１年	1

2．5　学生の海外派遣支援事業

2．5．1　平成28年度佐賀大学海外研修プログラム参加助成

（１）平成28年度佐賀大学短期海外研修プログラム参加助成

番号	派遣先	支援人数（参加学生数）	期間	プログラム名	助成額
1	中国 浙江科技学院	7	平成28年８月７日～ 平成28年８月22日	浙江科技学院プログラム	138, 104円
2	台湾・国立中興大学	1 （４）	平成28年８月９日～ 平成28年８月23日	中興大学プログラム	74, 146円
3	シンガポール カーティン大学	10 （12）	平成28年８月７日～ 平成28年９月４日	カーティン大学プログラム（夏）	576, 225円
4	カナダ ウィルフリッドロリエ大学	9 （10）	平成28年８月６日～ 平成28年８月24日	LEAF Business English Program	720, 000円

5	インドネシア ガジャマダ大学	5	平成28年８月８日～ 平成28年８月24日	DREaM プログラム	400, 636円
6	台湾 輔仁カトリック大学	5	平成28年８月30日～ 平成28年９月７日	輔仁－SAGA プログラム	164, 842円
7	オーストラリア シドニー工科大学	9 （11）	平成29年２月18日～ 平成29年３月19日	シドニー工科大学プログラム	63, 000円
8	シンガポール カーティン大学	11	平成29年２月18日～ 平成29年３月18日	カーティン大学プログラム（春）	663, 708円
9	中国 浙江理工大学	2 （３）	平成29年３月１日～ 平成29年４月２日	浙江理工大学プログラム	54, 210円
10	韓国 大邱大学校	6	平成29年３月５日～ 平成29年４月２日	大邱大学校プログラム（春）	459, 450円
11	台湾 国立東華大学	4	平成29年２月15日～ 平成29年３月19日	東華大学プログラム	57, 405円
12	香港 香港中文大学	１人 （10人） ＊８人は JASSO 受給	平成29年２月19日～ 平成29年２月28日	香港中文大学プログラム	50, 000円
13	リトアニア ヴィータウタス･マグヌス大学	10 （12）	平成29年３月12日～ 平成29年３月27日	VDU−SAGA プログラム	442, 621円
－	韓国大邱 大邱大学校	0 （８）	平成28年８月７日～ 平成28年８月27日	大邱大学校プログラム（夏）	協定校による 授業料免除
合計		80人 （108人）			4, 431, 347円

２．５．２　平成28年度佐賀大学学生海外派遣奨励費

番号	申請者・所属	学年	指導教員	留学予定先	留学期間
1	北原　茉莉 文化教育学部	３年	張　韓模	韓国 国民大学校	５ヶ月

【帰国留学生の報告】

北原　茉莉（文化教育学部）国民大学校

留学を終えて帰国して、改めて留学してよかったなと思う。やはり現地で生活し、現地の学生たちと共に学ぶことに大きな意味があると思う。日本にいては経験できないことをたくさん経験することができ、語学力は当然のことながらひとりの人としても大きく成長することができた。人前に出て発表することが苦手でなるべくその道を避けてきた私ですが、韓国語の授業の中で韓国語での発表を繰り返すうちに以前のような苦手意識が薄れるようになった。大学に入学当初は留学をすることなど１ミリも考えておらず、引っ込み思案な自分の性格や経済的にも留学は無理だと考えていた。しかし、佐賀大学に留学している韓国人学生との交流や、留学を目標に努力している友人の姿を見て自分も頑張ってみようと思えるようになった。経済的な問題も、アルバイトで貯めたお金や、佐賀大学からの奨学金もあり、無事に解決することが出来た。留学を考えていなかった人も、留学生との交流で考え方が変わることもある。SUSAP などで短期留学を気軽に体験することもできるし、留学を目指す人たちへの様々な支援もあるので迷っている人は国際課へ足を運んで相談してみることをおすすめする。

２．５．３　平成28年度佐賀大学学生海外研修支援事業（申請14件中８件採択）

No.	所属	プログラム名	申請者	派遣国	研修期間	支援人数（派遣人数）	助成額（円）
1	全学教育機構	Cultural Immersion Program at Slippery Rock Univeristy in America	早瀬博範　教授	アメリカ合衆国	11日間	10	700,000
2	経済学部	国際交流実習「経済発展と環境問題－日本とタイの経験から学ぶ－」	ラタナーヤカ ピヤダーサ　教授	タイ王国	14日間	9	450,000
3	工学系研究科	環アジア国際研修プログラム（グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用にかかわる建築・都市デザインワークショップ）	三島伸雄　教授	カザフスタン	８日間	10 (22)	700,000
4	医学部	ハワイ大学臨床推論ワークショップ	福森則男　助教	アメリカ合衆国	７日間	8	560,000
5	医学部	台湾輔仁大学及び関連総合病院における海外臨床実習・臨地実習	福森則男　助教	アメリカ合衆国	医学科21日間 看護学科８日間	8	400,000
6	農学部	ベトナムダナン市における環境保全及び農業技術移転に関する研修	田中宗浩　教授	ベトナム	10日間	10	500,000
7	文化教育学部	第34回ドイツ語とドイツ文化のための研修旅行	重竹芳江　准教授	ドイツ	30日間	10	700,000
8	全学教育機構	Cultural Immersion Program at Slippery Rock Univeristy in America（春期）	早瀬博範　教授	アメリカ合衆国	14日間	6	700,000
合計						75 (87)	4,710,000

【採択プログラムの成果報告】

１．早瀬博範　教授（全学教育機構）“Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America”

本プログラムを実施５年目になるが、毎年このグループから長期の交換留学生が出ており、しかもその数も増えており、明確で高い成果を上げている。ミニ留学としての目的が十分果たされている。体制もしっかりでき、どのようなことにも対応できるようになっている。今回、NYC でのテロ事件が発生し、NYC での研修が危ぶまれたが、本プログラムの安全危機体制がしっかりしていたために、問題なく対応できた。

２．ラタナーヤカ・ピヤダーサ　教授（経済学部）「国際交流実習「経済発展と環境問題－日本とタイの経験から学ぶ－」

①事前実習は講義と実態調査を実施した。講義では日本とタイの経済発展と環境問題、特に環境問題の解決に対する行政・企業・地域住民の貢献について理論的かつ実証的について学ぶ機会を与えた。
②実態調査は佐賀県と北九州市を対象に実施した。
③講義と調査の結果から学んだことについてグループごとにまとめさせ日本語・英語で発表させた。
④海外学習の中心的内容はカセサート大学教員による講義・実態調査・日本での調査結果の英語での発表・カセサート大学の学生との交流などを学生たちに行わせた。
⑤現地での実態調査はカセサート大学の学生との共同で実施された。
⑥日本人学生にカセサート大学学生と一緒に訪問大学の講義に参加し、大学案内、大学周辺の地域の環境問題の取り組みについて学ぶ機会を与えた。
⑦帰国後、タイで学んだことについて学内外の約100人の前で報告会を開催した（平成28年12月７日）。

３．三島伸雄　教授（工学系研究科）「環アジア国際研修プログラム（グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用に関わる建築・都市デザインワークショップ）」

JASSO の平成28年度海外留学支援制度（協定派遣）に採択されていたため、基準をクリアするために日本人学生も TOEIC で最低400点を越えることに真剣に取り組んだ。現地での議論は、手振り身振りも交えながら必

死に取り組んでいる姿を見ることができた。その結果、アルマトイの地形と街の関係、並びにそれらを踏まえた公園の空間構成を理解することができ、すべてのチームが充実した提案をカザフ人、タイ人、日本人の混成グループで取り組ませ、発表させることができた。日本人学生も、英語で発表し、充実していた。エクスカージョンでは、日本人建築家黒川紀章がコンペで１等をとって実施されたアルマフィを見ることができた。その結果、日本とカザフスタンの国家レベルの建築交流に触れることができた。また、中央アジアに位置するカザフスタンにおける、多様な国々との関係と建築・都市空間の成り立ちを理解することができた。

４．福森則男　助教（医学部）「ハワイ大学臨床推論ワークショップ」

臨床推論について医学知識と臨床技能を結びつけながら系統的に学習することで、帰国後も自身の学習方法が明確にできたことである。患者の症状から診断に至るまでにどのような鑑別診断を考えて必要な診察や検査を組み立てていくのかをシナリオに基づいて学習できた。次に、日本と米国の医学教育カリキュラム違いと医学生のモチベーションの差を比較することができ、今後の学習目標を具体的に設定することができた。とくに医学英語能力と英語によるコミュニケーションの必要性は、将来国際的に活躍する医師として必須な能力であり、すべての参加者が今後の継続した学習目標に掲げていた。

これらは今後の学習行動の向上と維持に大きな影響をあたえるものと期待できる。

５．福森則男　助教（医学部）「台湾輔仁大学および関連総合病院における海外臨床実習・臨地実習」

このプログラムを通して、佐賀大学医学部生が特に獲得しえた学習内容がいくつかあった。まずは、「日本と台湾の医療制度の違い」について直接触れて考える機会をもてたことである。台湾の医療保険制度は日本の制度と似ており国民皆保険制度により全員が医療保険に加入している。そのため十分な医療サービスを割安で受けることはできるが、患者は大病院やすぐに診察を受けることができる救急外来に集中するといった受領行動についての問題を知ることができた。次に医学英語について十分な学習機会をもてたことである。実習中に英語で講義を受けたり症例プレゼンテーションをおこなったことで、より実践的な医学英語を学ぶことができた。日本での実習ではそのような機会は少ないため、とても貴重な経験になったようである。最後に、国際的なコミュニケーション力を高めることができたことである。留学期間中に、台湾や他国の医療者および医学生と交流して良好なコミュニケーションをとることができ、その交流は帰国後も継続している。これらの成果は、今後留学生のみならず佐賀大学の国際的医療教育や活動に活用されうると考えられる。

６．田中宗浩　教授（農学部）「ベトナムダナン市における環境保全及び液肥利用農業の技術移転に関する研修」

現地での事前調整やワークショッププログラムは教官サイドで立案したが、具体的な活動計画や作業手順は学生の管理に任せた。その結果、言葉の壁を気にせずに、身振り手振りによって現地の農家らと親密に協力しながら活動する自立性を導き出すことができた。農家向けワークショップに取り組んだホアバン地区では、人民委員会及び知元企業グループからも絶大な信頼を頂くことができた。また、現地での研修の様子は、ベトナムの複数のマスコミによって取り上げられ、帰国後ベトナム全土に報道された。当方らの活動は、昨年から引き続き、ダナン市関係部局からも高い注目を集めており、滞在中は関係部署が活動の見学に訪れ、現地課題の情報収集と解決に向けた議論を積み重ねる事ができた。また、学生らと実施した液肥利用のワークショップの結果は極めて良好であった。ダナン市では９月からODA事業で建設した200トン規模の液肥製造施設を稼働させており（田中設計）、農家や現地企業は、液肥の安定供給に強い期待を寄せている。

なお、今年８月にはJICA事業としてダナン市関係者約20人が佐賀大学を訪問しており、その際にが生徒の顔合わせと現地研修の打ち合わせを行っていたこともあり、今回の滞在中は行く先々で手厚い援助を頂くことができた。

７．重竹芳江　准教授（全学教育機構）「第34回ドイツ語とドイツ文化のための研修旅行」

ホームステイではよい印象を持ってもらえた学生が多かった。出発前は語学力が重要だということをいくら言ってもなかなか思うように学生に伝わらなかったが、ホームステイ中に助けてくれる引率者もいない状態であらゆる手段を最大限に駆使して自力でコミュニケーションをとる体験をしたことは、どのような学び方をすれば実地で外国語を活かせるかを身をもって体験するよい機会になったと思う。語学力のなさを補うかのように、礼儀正しさ、感じのよさについてはどこに行っても絶賛された。日本の大学生グループでも東京の私立の大学などでは昨今我儘な若者が目につくようになったという話を聞いたが、その点「佐賀大学の学生は昔ながらの日本の良さを保持している」と褒められた。このような「美点」は意識してはいなかったが、大切にしていくべきだと改めて思った。

８．早瀬博範　教授（教育学部）“Cultural Immersion Program at Slippery Rock University in America”

特筆すべき成果としては、まず参加学生の装具的な英語力の向上を挙げたい。具体的には、全ての学生がスリッパリーロック到着直後は、特に会話の場面で、適切な語彙や時制の選択、正しい文章構造の生成がうまく出来ていなかった。しかしながら、研修終了時には、完全ではないにしろ、参加学生のスピーキング力は大きく向上しており、セルフモニタリング等のメタ認知が働いていた様子が窺えた。リスニング力についても同様で、もちろん全ての英語が聞き取れるまでには至っていないが、引率教員の目からも大きく向上したことが確認出来た。また、この研修では毎日課題としてジャーナルを書き、スリッパリーロック大学の Writing　Center で添削してもらうことになっていた。自己申告ではあるが、適切なアドバイスにより、参加学生からはライティング力が改善したという報告を受けている。アメリカ文化の受容という点に関しても特筆すべき成果として挙げたい。研修開始当初は日米の文化の違いに戸惑っている姿を頻繁に目にしたが、ホームステイや大学での授業体験験により、徐々にアメリカの生活に順応できていたことが確認出来た。

３．キャンパスの国際化

キャンパスにおける多文化共生、とりわけ留学生と日本人学生の互恵的な関係を創出することを目指して、国際交流推進センターでは多様な活動を展開している。平成25年より異文化への理解と高いコミュニケーションスキルを備えた学生を「佐賀大学グローバルリーダーズ」として採用し、国際交流推進センター・国際課とが協働しキャンパスの多文化共生につながる取り組みを行なっている。メンバーには留学生も半数含まれ、留学生が常に「支援される側」として位置付けられるのではなく、キャンパス・コミュニティの構成員としてより良い環境をつくるために活躍・貢献してもらうことを意図している。

グローバルリーダーズの主たる活動の一つがランゲージ・ラウンジである。お昼休みの１時間に日本人学生と留学生が集い、昼食を取りながら外国語や外国文化についての会話を楽しむものである。学生主体で行うものであり、ファシリテーター役が学生であるため、肩肘を張らず参加できる。平成28年度に実施した言語は中国語、韓国語、英語、日本語、バングラ語の５言語であった。また１回限りのセッションとしてブラジルとエジプトの特別ラウンジも実施した。日本人にとってあまり馴染みのない国について、在学中の留学生に言語や文化などを紹介してもらっている。平成28年度はラウンジ開催数が90回を数え、参加者数は延べ1,332人を記録した。本年度からは一部のラウンジを図書館１階のラーニングコモンズで実施させてもらうことになった。多くの学生の目に触れることで、国際交流にあまり関心のない学生にも認知されるようになること、また一歩を踏み出せずに参加を躊躇している学生に和やかな雰囲気が伝わることを期待している。本年度、実施したその他の取り組みとして、留学生と日本人学生との交流を促進する年２回スポーツ交流会、12月のカルチュラルナイト、留学生フェア

ウェルパーティーの開催、新入留学生の日本社会・学生生活への適応をうながす新入留学生研修旅行での支援、オープンキャンパスでの高校生向けランゲージ・ラウンジの実施などである。スポーツ大会は毎回100人程度の学生が参加し大変人気がある。また面識のない学生同士、かつ多国籍チームで競技するため、国際交流を促進する取り組みとして意義のあるものである。言語をあまり必要とせず、リフレッシュできることから、大学院レベルの留学生が大変多く参加している。上記のランゲージ・ラウンジ活動には、日本人学生との交流を期待して留学し、比較的時間的に余裕のある交換留学生が主に参加している。一方、スポーツ交流会は大学院生も気軽に参加できるため、取り組み全体としてバランスのとれた活動が展開できたと考える。

Ⅲ．学術研究協力部門

国際交流推進センターにおける「研究者海外派遣の支援」は個人を対象とした派遣ではあるが、その先に大学間の学術研究交流へと発展することへ望みを託す事業と言える。研究の世界はネットワークの拡充によりグローバル化が進み、地理的な意味での地方の大学の研究環境は昔に比べると改善されたのかもしれない。多少の不便さに目をつぶれば、海外との研究打ち合わせもインターネット経由で簡単に行うことができる。しかしながら、最先端の情報、技術や革新的な方法などは多くの場合、面と向かった何気ない議論から出発したり、実験分野では一緒に作業をしてみないとわからないことも多々ある。この支援事業をきっかけに実績を積み、更なる外部資金獲得、さらに大きな枠組みでの研究体制の構築につなげることで、佐賀大学の学術研究を発展させることが期待される。新しい研究を始めたい若手の方の積極的な応募があることを願っている。

1．国際研究集会開催支援事業

1．平成28年度佐賀大学国際研究集会開催支援事業（申請５件中４件採択）

	氏名・所属	開催地	研究集会名	開催期間	参加者数	支援金額
1	熊本栄一　教授 医学部	佐賀大学	第13回日韓脳科学・心筋 ・平滑筋合同シンポジウム	平成28年８月24日 ～８月26日	37人	580,000円
2	三島伸雄　教授 工学系研究科	佐賀県鹿島市	環アジア国際セミナー	平成28年７月27日 ～８月４日	65人	760,000円
3	大串浩一郎　教授 工学系研究科	佐賀大学	第６回在来知歴史学 国際シンポジウム（ISHIK2016）	平成28年10月21日 ～10月26日	100人	690,000円
4	ラタナーヤカ・ピヤダーサ　教授 経済学部	佐賀大学	「国際教育研究交流事業」～第12回国際シンポジウム 「アジアの経済発展に対する外国人労働者の役割：現状と課題」	平成29年１月22日 ～１月26日	284人	710,000円
					合計	2,740,000円

【採択プログラムの成果報告】

1．熊本栄一　教授（医学部）「第13回日韓脳科学・心筋・平滑筋合同シンポジウム」

講演発表は日本から11演題、韓国から７演題、ポスター発表は日本から８演題、韓国から５演題であり、それぞれの発表数が日本と韓国でほぼ同数であったことは評価できる。日本と韓国のそれぞれで修士課程の学生の参加があり、古手ばかりでなく若手の研究者の交流も行われた。このシンポジウム開催の前に佐賀大学出身の研究者２人により研究の面白さを語ってもらう講演会を開催したが、聴衆した学生から活発な質問が行われ好評であった。

2．三島伸雄　教授（工学系研究科）「環アジア国際セミナー」

環アジア国際セミナーを鹿島市肥前浜宿で開催するようになって、今回で３回目である。年々参加者が多くなり、これまでで最も多い参加者になった。地域でも懸念している酒蔵の再生、肥前浜駅、佐賀銀行浜支店の改修提案を行うことができた。JASSO の海外留学支援制度（協定受入）では満額32人で採択されて、学生を受け入れることができた。

肥前浜宿の伝統的建造物に宿泊し、科学研究費（挑戦的萌芽）「地方都市の歴史的町並みにおける団体受け入れ民泊事業モデルの社会実験」の調査も実施することができた。報告書を作成して、地域や各大学に配布することができた。

３．大串浩一郎　教授（工学系研究科）「第６回在来知歴史学国際シンポジウム（ISHIK2016）」

今回で６回目となる同国際シンポジウムにおいて、在来知歴史学会の総会・理事会などを開催し、今後の在来知歴史学に関する継続した取り組みを集中的に議論することができた。また、今回の特別なテーマであった科学技術と環境問題の解決に向けて在来知が果たすべき役割についても報告と議論が熱心に行われた。GDP 世界２位と３位の中国と我が国の研究者の間でこのような学術交流が行われたことは本シンポジウムの顕著な成果であると思われる。

４．ラタナーヤカ・ピヤダーサ　教授（工学系研究科）「国際教育研究交流事業」～
第12回国際シンポジウム「アジアの経済発展に対する外国人労働者の役割：現状と課題」

以下の５点が今回の国際研究集会により得られた成果である。①海外協定大学の教員との共同研究について関心が高まったこと、②今日の世界経済、特にアジア経済の発展のために極めて必要性が高い課題について英語・日本語で発表・議論する機会になったこと、③地域の市民の方々に海外の社会福祉制度を理解してもらう機会を与えたこと、④協定校との教育研究関係を強化できたこと、⑤佐賀県の魅力を海外の研究者に紹介する機会になったこと。

２．研究者海外派遣支援事業

２．平成28年度佐賀大学研究者海外派遣事業（申請２件中２件採択）

	氏名・所属	国名	海外派遣機関名	派遣機関	支援金額
1	三島　伸雄　教授 工学系研究科	カザフスタン	カザフスタン建築土木高等 アカデミー	平成28年６月17日～ ６月29日	750,000円
2	房安　貴弘　准教授 工学系研究科	ドイツ	ドイツ電子シンクロトロン 研究所	平成28年11月２日～ 11月16日	546,000円
				合計	1,296,000円

【採択プログラムの成果報告】

１．三島伸雄　教授（工学系研究科）「グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用」

アルマトィは、Seven River と言われる地域にある旧首都であり、シルクロード都市、モンゴル時代、そしてソ連支配を経て、斜面地の排水を配慮したグリッド状の街割りによって構築された都市である。そのなかでソ連独立後の公園等インフラ整備が進められている。このような都市整備が行われた地域の調査・研究を佐賀大学、タマサート大学、カザフスタン建築土木高等アカデミーの３大学合同で行うことができた。特に、未整備のままである公園区域に対する空間的な調査については集中的に行い、地区住民の活動調査、利活用に関する認識調査、土地利用状況調査、市街地特性を考慮した提案作成をチームに分かれて行い、意見交換を行うことができた。３大学の学生が寝食をともにして交流したことにより、学生同士の親密な関係を構築することができた。学部間交流協定に関する意見交換を行い、概ね理解を得ることができ、学部間 MOA の草稿を作成することができた。

２．房安貴弘　准教授（工学系研究科）「ヒッグス粒子の詳細測定に向けた検出器モジュールの開発研究」

陽イオンフィルタが ILC 飛跡検出器に適用できるためには、上述した電子の透過率が80％以上である必要がある。そうでないと、かえって位置分解能を低下させてしまう。今回の実験で得られたデータをグループで解析したところ、透過率は約80％を達成できていることが分かった。また、その場合に位置分解能は10％ほど悪くな

ることが想定されるが、実験データから得られた分解能は、ほぼ想定どおりであり、これは、ILC の実現に必要な仕様の範囲内に収まっている。以上の成果により、ILC 飛跡検出器の重要課題である「陽イオンの逆流を防ぎ、すべての入射位置に対して位置分解能を100μm 以下にする」という問題について、技術的な裏付けを確保することができ、ヒッグス粒子の詳細測定に向けて一定の技術進展を得ることができた。

Ⅳ．地域国際連携部門

１．「平成28年度産学官国際交流セミナー」の開催

８月８日、佐賀大学において「産学官国際交流セミナー」が開催され、県内企業や留学生など約70人が参加した。

今回は、第１部として、文部科学省官民協働海外留学支援制度トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム地域人材コースの「世界とともに発展する SAGAN グローバル人材育成事業」で海外留学と県内企業でのインターンシップを体験する本学学生の壮行会をさが地方創生人材育成・活用推進協議会（事務局：佐賀大学）の主催で実施した。壮行会では、会長の宮﨑耕治佐賀大学学長、文部科学省の関靖直総括審議官及び佐賀県地域交流部の松隈克彦国際課長の挨拶の後、支援企業による海外留学生への激励があり、派遣留学生４人による決意表明があった。引き続き行われた第２部のセミナーは、佐賀県内の企業と留学生等の間で、佐賀地域の国際化の方向性及び日本企業への就職について理解を深めることを目的として平成23年度から毎年開催されており、佐賀県内の高等教育機関、国の機関、地方公共団体、経済団体及び国際交流関係団体等から構成される佐賀地域留学生等交流推進協議会（事務局：佐賀大学）の主催で、海外進出・販路拡大を目指す企業、留学生のスキルに期待する企業、日本企業へ就職を希望する留学生及び日本人学生を対象として開催された。セミナーでは、トビタテ！留学 JAPAN の支援企業を含む県内４社からの企業紹介及び日本企業に就職した中国出身の卒業生から後輩へのアドバイスとなる就職体験の報告があり、最後に参加者による交流会が行われた。参加した留学生は企業の説明を真剣な表情で聞き入っており、有意義なセミナーとなった。

挨拶をする宮﨑学長

挨拶をする関総括審議官

決意表明をするトビタテ！学生

先輩留学生の就職体験報告

2．トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム「地域人材コース」「世界と共に発展する SAGAN グローバル人材育成事業」

本件は、平成28年３月31日採択され、今年度実施された、日本人学生の送出事業である。佐賀県地域のほか、新潟県長岡市、島根県、宮崎県が同時に採択され、全国の15地域で実施されている。

トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム「地域人材コース」は、平成27年度より地域を活性化するグローカル人材の育成を目指したプログラムで、佐賀県地域では「地（知）の拠点大学による地方創生事業（COC+）」の申請団体である「さが地方創生人材育成・活用推進協議会」（会長：宮﨑耕治佐賀大学学長）が中心となり佐賀県や地域企業と連携し取り組んでいる。今年度は７人の申請があり、書面審査に続き、支援企業の方々にも加わって頂いた面接審査の結果４人が選抜され、それぞれインド、スリランカ、カナダ、フィリピンへと飛び立つことができた。また、初年度にもかかわらず多くの地元企業にご支援を賜り、選抜された４人は JTB 九州・佐賀支店、一般社団法人ジャパン・コスメティックセンター（JCC）、株式会社オプティムで海外留学前後にインターンシップも経験することができた。

壮行会にて

１年間を終えて知事への報告

フィリピンでのインターンシップ

夢実現へ留学
4学生が決意
佐賀大で壮行会

佐賀市

文部科学省が支援する若者の海外留学事業に参加する県内の大学生の壮行会が、佐賀市の佐賀大学本庄キャンパスで開かれた。夢の実現を目指して海外留学と県内企業へのインターンシップ（就業体験）に臨む佐賀大生４人が決意を語った。

世界で活躍する人材育成を目的に、同大学などでつくる「さが地方創生人材育成・活用推進協議会」が本年度から取り組む。４人はインド、スリランカ、フィリピン、カナダに最長で半年間留学し、その前後に県内企業でインターンシップを行う。文科省の交付金や県内企業の寄付金を奨学金などに充てる。

壮行会では、４人が留学先での計画を紹介し、将来の夢を語った。９月から４カ月間、インドに留学する理工学部３年の井上賢生さん(22)は語学学校に通いながら、地方からの情報発信などの可能性を模索する。「成長が著しいインドでリーダーシップを磨きたい」と力強く語った。

（江島貴之）

留学先のインドで学ぶ決意を語る井上賢生さん＝佐賀市の佐賀大学本庄キャンパス

『佐賀新聞』2016年８月20日付21面

３．佐賀県立武雄高校との交流

●佐賀県立武雄高校との交流

平成27年度より、佐賀大学留学生と佐賀県立武雄高校の交流を開始した。平成28年度も引き続き、Ⅰ～Ⅲの３回にわけて行った。交流の参加者や内容の詳細は以下の表のとおりである。

いずれの交流も、留学生にとっては①日本事情を知る（スポーツや学校生活、武雄市の名所）、②日本人高校生と交流する、③日本人を相手に日本語を使う、という経験を得るまたとない機会となったと考えられる。武雄高校側からも、生徒の満足度が高かったとの評価を得た。これらの交流は、今後も、継続して行っていく方針である。

項目	交流Ⅰ	交流Ⅱ	交流Ⅲ
授業科目／プログラム	SPACE−J・日研生のための科目「日本事情研修Ｄ」	香港中文大学サマープログラム・佐賀大学サマープログラム合同	SPACE−E のための科目「日本事情研修Ａ」
授業担当者	布尾・中山	吉川・新美	古賀・丹羽
場　　所	武雄高校	武雄高校	佐賀大学
実　施　日	2016年７月９日（土）	2016年７月５日（火）	2016年12月14日（水）
参加留学生	28人	27人	16人
内　　容	スポーツをテーマとして日本事情について学ぶ授業の一環として訪問した。 内容： ①ゲーム・自己紹介 ②部活道見学 ③武雄市内見学	香港中文大学と SUSP の短期受け入れの留学生が参加。内容： ①英語授業での英語による学生交流・七夕飾り作り ②部活動見学 ③武雄市内見学	高校生と留学生がグループに分かれて交流した。高校生から高校生活をめぐる様々なトピックについての発表があり、質疑応答をした。そのあと、スモールグループを組んで、さらに交流した。

交流Ⅰ写真

交流Ⅱ写真

４．地域国際交流行事等への協力

○鹿島ガタリンピックへの留学生参加

【日　時】平成28年６月４日（土）～５日（日）

【主　催】第32回鹿島ガタリンピック実行委員会

【参加者】留学生27人（中国・韓国・台湾・バングラデシュ・タイ・インドネシア・ベトナム・エジプト・フランス・モロッコ・チュニジア・トルクメニスタン・モザンビーク等）

【内　容】

鹿島市内でのホームステイ／のごみふれあい楽習館　６月４日（土）

「鹿島ガタリンピック」への参加　６月５日（日）

鹿島ガタリンピック実行委員会による当行事およびホームステイへの参加依頼に対し、本学留学生の募集および行事参加への協力を行ったものである。参加者はガタリンピック開催前日に鹿島町を訪れ、町内の家庭にホームステイ、あるいは「のごみふれあい楽習館」において宿泊させていただいた。留学生にとって、日本の家庭生活、文化を知る貴重な機会であった。翌日は「鹿島ガタリンピック」の各種競技に参加し、地域の社会と文化に触れ、参加者や町の方々と交流した。なお、開催に先立ち、佐賀大学にて実行委員会の関係者による参加者事前説明会も行われた。

ガタリンピック入場準備中

戦い終了後の笑顔

○TOMODACHI プロジェクトによる海外学生の佐賀大学訪問

【日　時】平成29年１月29日（木）

【共　催】認定 NPO 法人地球市民の会・佐賀大学国際交流推進センター

【対象者】プログラムに参加する中国および韓国からの大学生等30人

【概　要】

認定 NPO 法人地球市民の会の協力依頼を受け、アジア・パートナーシップ・プロジェクト「TOMODACHI 100」で来日した中国及び韓国からの大学生等30人に対して、国際交流推進センターの新美准教授から佐賀大学の紹介・留学制度等の説明につづき、芸術地域デザイン学部の中村教授から「映像デザインについて」、教育学研究科の上田夏菜子さんから「学生によるストーリーアニメーションの制作について」と題し、ミニ講義をして頂いた。また、今年は佐賀県立農業高等学校が文部科学省よりスーパーグローバル・ハイスクールに指定されたことから、この機会に中国・韓国の学生に、「佐賀の農業事情について」と「地域の発酵食品について」を発表し、佐賀を紹介頂いた。

中村教授のミニ講義

佐賀農業高校生の発表

○佐賀嬉野バリアフリーツアーセンターによる留学生との意見交換・市民との交流会

【日　時】平成29年２月18日（土）

【主　催】佐賀嬉野バリアフリーツアーセンター

【対象者】本学留学生

【概　要】

佐賀嬉野バリアフリーツアーセンターが嬉野市の委託事業「UD おもてなし体制整備事業」の一環で、障がい者・高齢者・外国人・ベビーカーユーザー等を含む全ての人のおもてなし体制を整備していくため、本学留学生を招き、嬉野市内を見学し、商店街の方々との意見交換を通じて、嬉野市のユニバーサルデザインの整備に資する活動であった。

センターの方々に案内され、街歩きをする

センターの方々との意見交換会

５．佐賀県との連携

今年度も佐賀県とは綿密に意見交換をしてきたが、なかでも佐賀県国際課及び佐賀市消防防災課等との連携で、本学留学生の地域総合防災訓練への参加が実現した。平成28年10月23日に嘉瀬小学校で実施された佐賀市総合防災訓練にはじめて本学留学生９人が参加し、地域住民とともに、防災時の受付から、給水、緊急時の非常食体験などすることができた。

佐賀県内で増加する多様な外国人、留学生とその家族などは災害時には災害弱者となってしまう可能性が高く、緊急時の際の対応について、自治体・地域住民とともに常日頃訓練しておくことが求められており、今後もこのような活動に取り組んで行く必要があるとの共通認識を改めて確認した。

避難訓練時の受付体験

緊急時の給水体験

資料１：学長・理事表敬訪問及び学術交流

○５月20日　東亞大学校（韓国）学長表敬訪問
学術・学生交流に関する意見交換のため、権　五昌学長、金　完仲国際交流所長ほか２人が訪問。

○８月２日　韓国交通大学（韓国）・タマサート大学（タイ）、チェンマイ大学（タイ）
タンリン工科大学（ミャンマー）理事表敬訪問
環アジア国際セミナー実施の発展、日韓タイの協力拡大、タンリン工科大学との学科間プログラム協定締結についての協議のため、Dr. Kang Hyukjun（韓国交通大学助教）、Dr. Pawinee Iamtrakul（タマサート大学准教授）、Dr. Shummadtayar Umpiga（チェンマイ大学講師）、Dr. Hnin Wingt Yi（タンリン工科大学准教授）が訪問。

○８月23日　マラン国立大学（インドネシア）理事表敬訪問
学術・学生交流に関する意見交換のため、Prof. Bambang Budi Wiyono (Dean, Faculty of Education), Prof. Punaji Setyosari(Head, Educational Technology, Graduate School of Education)ほか５人が訪問。

○10月18日　温州大学（中国）理事表敬訪問
学術・学生交流に関する意見交換のため、趙　敏氏（副書記・大学理事・前生命及環境科学院長）、呉明江氏（生命及環境科学院長）ほか２人が訪問。

○10月24日　第六回在来知歴史学国際シンポジウム開催に伴う理事表敬訪問
李　毅氏（中国社会科学院世界経済与政治研究所研究員）、張　涛氏（清華大学自動化系教授）ほか７

人が訪問。

○10月24日　ヴァルドワーズ県（フランス）代表団学長表敬訪問
学術・学生交流及び産学連携に関する意見交換のため、Mr. Philippe SUEUR（ヴァルドワーズ県県議会第一副議長）、Ms. Florence DUFOUR（バイオ産業大学長）ほか22人が訪問。

○12月８日　ラトローブ大学（オーストラリア）理事表敬訪問
学生交流についての意見交換のため、Mr. Kelly Smith（Pro Vice Chancellor (international)）が訪問。

○１月25日　カセサート大学（タイ）、ペラデニア大学（スリランカ）、オークランド大学（ニュージーランド）、全南大学校（韓国）理事表敬訪問
経済学部主催の国際経済シンポジウム開催のため、Prof. Chollada Luangpituksa（カセサート大学経済学部准教授）、Prof. S. Samita（ペラデニア大学農学研究所長）、Prof. Kenneth Jackson（オークランド大学教授）、Prof. Iltae Kim（全南大学校教授）が訪問。

○２月３日　アンザン大学（ベトナム）学長表敬訪問
学術・学生交流等の促進並びに意見交換のため、Vo Van Thang（アンザン大学長）ほか10人が訪問。

○３月28日　マラン国立大学（インドネシア）理事表敬訪問
学術・学生交流に関する意見交換のため、Dr. Andoko（工学部長）、Dr. Hary Suswanto（工学部副学部長）、Dr. Eng Anik Nur Handayani（工学部講師・佐賀大学卒業生）が訪問。

資料２：国際交流推進センター事業関連の海外出張・訪問

期間	行先（国）	訪問先	用件	出張者名
平成28年４月１日 ～４月２日	中国	上海大学、 浙江理工大学　他	SUSAP 見学・担当者との懇談会、学内視察、表敬、佐賀県人会との懇談会他	新美　達也　准教授
平成28年７月28日 ～８月４日	インドネシア	ガジャマダ大学、 カワラン工業団地、 在インドネシア大使館	西・中部ジャワ工業団地調査	新美　達也　准教授
平成28年８月８日 ～８月11日	インドネシア	ガジャマダ大学	SUSAP　DREaM プログラム参加学生の引率	山田佳奈美　コーディネーター
平成28年８月17日 ～８月25日	ベトナム	アンザン大学、 カントー大学、 ハノイ医科大学　他	MOT 研修　日本企業訪問・視察、アンザン大学表敬　他	新美　達也　准教授
平成28年８月30日 ～９月１日	台湾	輔仁カトリック大学、 国立政治大学	SUSAP 佐賀・輔仁プログラム参加学生の引率	山田　直子　准教授
平成28年10月30日 ～11月３日	ベトナム	ホーチミン市工業団地、 日系企業　他	ホーチミン市工業団地調査	新美　達也　准教授
平成28年12月16日 ～12月20日	ベトナム	ハノイ市、 ハノイ外国語大学、 ハノイ水利大学	越国際学会出席、ハノイ外国語大学・ハノイ水利大学表敬訪問	新美　達也　准教授
平成29年２月８日 ～２月15日	タイ・ベトナム・ラオス	【タイ】タマサート大学、 在タイ大使館 【ベトナム】ハノイ外国語大学、ハノイ国際大学、自然科学大学、人文社会科学大学、ハノイ水利大学　他 【ラオス】ラオス国立大学	佐賀大学ホームカミングデー in ハノイ－佐賀大学ネットワーキング、 協定校等訪問	新美　達也　准教授
平成29年２月９日 ～２月12日	ベトナム	ハノイ外国語大学、 ハノイ国際大学、 自然科学大学、 人文社会科学大学　他	佐賀大学ホームカミングデー in ハノイ－佐賀大学ネットワーキング　他	滝澤　　登　理事(センター長) 成瀬　雅也　国際課長 山田佳奈美　コーディネーター
平成29年２月19日 ～２月28日	中国	香港中文大学　他	SUSAP2017SPRING　佐賀大学・香港中文大学交流プログラム引率	吉川　　達　講師
平成29年３月１日 ～３月３日	中国	上海市内、 浙江省杭州市内	SUSAP 浙江理工大プログラム参加学生の現地同行・引率	桑村　祥太　北京工業大学院生
平成29年３月３日 ～３月10日	ベトナム	ベトナム大学、 科学開発研究所、 タインホア医療短期大学 他	平成28年度科研の研究調査	新美　達也　准教授
平成29年３月11日 ～３月19日	リトアニア	ヴィータウタス･マグヌス大学 他	SUSAP2017Spring 佐賀大学・VMU 交流プログラム引率	山田　直子　准教授
平成29年３月30日 ～３月31日	韓国	大邱大学校	SUSAP 大邱大学校プログラム参加学生の引率	山田　直子　准教授

資料３：平成28年度　留学生数

学部等 Faculties / 国・地域 Country·Area	学部 Undergraduates															大学院 Graduate Schools									
																修士課程（博士前期） Master's Course									
	教育学部 Faculty of Education		芸術地域デザイン学部 Faculty of Art and Regional Design		文化教育学部 Faculty of Culture and Education		経済学部 Economics		医学部 Medicine		理工学部 Science and Engineering		農学部 Agriculture		学部計 Total	教育学研究科 Education		経済学研究科 Economics		地域デザイン研究科 Regional Design		医学系研究科 Medicine		工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering	
	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense		国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense
ネパール連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Nepal															0										
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh															0	1									
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka															0					1					
タイ王国 Kingdom of Thailand															0			2			2				1
マレーシア Malaysia								1				15			16										
インドネシア共和国 Republic of Indonesia															0										
大韓民国 Republic of Korea								1				2			3										1
トルクメニスタン Turkmenistan															0										
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam						3		2						1	6						1				
中華人民共和国 People's Republic of China						2		13				4			19		3		3		3				2
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia															0										
台湾 Taiwan															0										
ケニア共和国 Republic of Kenya															0										
エジプト・アラブ共和国 Arab Republic of Egypt															0										
チュニジア共和国 Republic of Tunisia															0										
モロッコ王国 Kingdom of Morocco															0										
セネガル共和国 Republic of Senegal															0										
アメリカ合衆国 United States of America															0										
フランス共和国 French Republic															0										
オーストラリア Commonwealth of Australia															0										
パキスタン・イスラム共和国 Islamic Republic of Pakistan															0										
モザンビーク共和国 Republic of Mozanbique															0										
ミャンマー連邦共和国 Republic of the Union of Myammer															0										
フィンランド共和国 Republic of Finland															0										
セルビア共和国 Republic of Serbia															0										
ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany															0										
ブラジル連邦共和国 Federative Republic of Brazil															0										
計 Total	0	0	0	0	0	5	0	17	0	0	0	21	0	1	44	1	3	2	3	1	6	0	0	0	4

（平28. 5. 1現在）As of May 1, 2016

学部等 Faculties / 国・地域 Country·Area	大学院 Graduate Schools													研究生 科目等履修生 特別聴講学生 Research·Part-Time Students·Special Audit		鹿児島大学大学院連合農学研究科 United Graduate School of Agricultural Kagoshima University		日本語・日本文化研修生 Japanese Studies Students	合計 Total		
	修士課程（博士前期）Master's Course		博士課程 Doctoral Course		博士後期 Doctoral Course		環境・エネルギー科学グローバル教育プログラム PPGA 博士前期 Master's Course		博士後期 Doctoral Course		特別コース 博士後期 PSJP Doctoral Course		大学院計 Total								
	農学研究科 Agriculture		医学系研究科 Medicine		工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering		工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering		工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering		工学系研究科 Graduate School of Science and Engineering										
	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense		国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	国費 National Expense	国費 National Expense	私費 Private Expense	計 Total
ネパール連邦民主共和国 Federal Democratic Republic of Nepal						1		2					3						0	3	3
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh	2		1		5	1	3	1	5				18		1	2	2		19	5	24
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka					1	1							2		2	1			3	3	6
タイ王国 Kingdom of Thailand						1	2	4	5				12		2				9	10	19
マレーシア Malaysia													0						0	16	16
インドネシア共和国 Republic of Indonesia							1					1	2		8				1	9	10
大韓民国 Republic of Korea													0		14				0	18	18
トルクメニスタン Turkmenistan													0					1	1	0	1
ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Viet Nam	1				1								2		3				2	10	12
中華人民共和国 People's Republic of China		2	2	2		12		2					20		13				2	61	63
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia					1								1		1			1	2	1	3
台湾 Taiwan													0		11				0	11	11
ケニア共和国 Republic of Kenya								1					1						0	1	1
エジプト・アラブ共和国 Arab Republic of Egypt				1				1					2			1			1	2	3
チュニジア共和国 Republic of Tunisia													0	1					1	0	1
モロッコ王国 Kingdom of Morocco								1					1						0	1	1
セネガル共和国 Republic of Senegal								1					1						0	1	1
アメリカ合衆国 United States of America													0		1				0	1	1
フランス共和国 French Republic													0		2				0	2	2
オーストラリア Commonwealth of Australia													0		1				0	1	1
パキスタン・イスラム共和国 Islamic Republic of Pakistan						1							1						0	1	1
モザンビーク共和国 Republic of Mozanbique		1						1					2						0	2	2
ミャンマー連邦共和国 Republic of the Union of Myammer								2	1				3						1	2	3
フィンランド共和国 Republic of Finland													0		1				0	1	1
セルビア共和国 Republic of Serbia													0					1	1	0	1
ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany													0		1				0	1	1
ブラジル連邦共和国 Federative Republic of Brazil													0					1	1	0	1
計 Total	3	3	3	3	8	17	6	16	11	0	0	1	71	1	61	4	2	4	44	163	207

資料４：学術交流

（平29．４．１現在）

国名 Country	学術交流協定大学等 Partner Universities and Institutes	協定締結年月日 Since
大学間　University		計87校
大韓民国 Republic of Korea	全南大学校 Chonnam National University	平３．３．８ Mar. 8, 1991
	安東大学校 Andong National University	平９．12．11 Dec. 11, 1997
	国民大学校 Kookmin University	平11．３．29 Mar. 29, 1999
	釜山大学校 Pusan National University	平12．２．２ Feb. 2, 2000
	木浦大学校 Mokpo National University	平12．８．３ Aug. 3, 2000
	釜慶大学校 Pukyong National University	平14．４．18 Apr. 18, 2002
	済州大学校 Cheju National University	平14．８．９ Aug. 9, 2002
	韓国技術教育大学 Korea University of Technology and Education	平14．10．８ Oct. 8, 2002
	光州女子大学校 Kwangiu Women's University	平17．７．14 Jul. 14, 2005
	培材大学校 Pai Chai University	平18．７．11 Jul. 11, 2006
	牧園大学校 Mokwon University	平19．５．16 May16, 2007
	大邱大学校 Daegu University	平19．６．26 Jun. 26, 2007
中華人民共和国 People's Republic of China	華東師範大学 East China Normal University	平10．５．15 May. 15, 1998
	北京工業大学 Beijing University of Technology	平10．12．８ Dec. 8, 1998
	首都師範大学 Capital Normal University	平11．４．12 Apr. 12, 1999
	中国農業大学 China Agricultural University	平12．10．17 Oct. 17, 2000
	遼寧師範大学 Liaoning Normal University	平13．11．６ Nov. 6, 2001
	ハルビン工業大学 Harbin Institute of Technology	平13．11．12 Nov. 12, 2001
	華東理工大学 East China University of Science and Technology	平15．４．１ Apr. 1, 2003
	浙江理工大学 Zhejiang Sci-Tech University	平16．９．６ Sep. 6, 2004
	西南政法大学 Southwest University of Political Science and Law	平19．10．31 Oct. 31, 2007
	浙江科技学院 Zhejiang University of Science and Technology	平19．12．25 Dec. 25, 2007
	遼寧大学 Liaoning University	平20．４．30 Apr. 30, 2008
台湾 Republic of China, Taiwan	輔仁カトリック大学 Fujen Catholic University	平13．８．９ Aug. 9, 2001
	国立政治大学 National Chengchi University	平16．９．13 Sep. 13, 2004
	国立中興大学 National Chung Hsing University	平16．９．14 Sep. 14, 2004
	国立台北大学 National Taipei University	平17．10．６ Oct. 6, 2005
	国立東華大学 National Dong Hwa University	平18．６．30 Jun. 30, 2006
	元培科技大学 Yuanpei University	平19．７．６ Jul. 6, 2007
	国立連合大学 National United University	平20．８．８ Aug. 8, 2008
	文藻外語学院 Wenzao Ursuline College of Language	平21．９．４ Sep. 4, 2009

ベトナム社会主義共和国 Socialist Republic of Vietnam	ハノイ農業大学 Hanoi University of Agriculture	平12. 12. 7 Dec. 7, 2000
	ノンラム大学 Nong Lam University	平18. 11. 9 Nov. 9, 2006
	ベトナム国家大学ハノイ校外国語大学 University of Languages and International Studies-Vietnam National University, Hanoi	平19. 8. 6 Aug. 6, 2007
	ビン大学 Vinh University	平23. 2. 21 Feb. 21, 2011
	ベトナム国家大学ハノイ校自然科学大学 University of Science-Vietnam National University, Hanoi	平24. 3. 13 Mar. 21, 2012
	ベトナム国家大学ハノイ校工科大学 University of Engineering and Technology-Vietnam National University, Hanoi	平24. 3. 13 Mar. 21, 2012
	アンザン大学 An Giang University	平25. 3. 11 Mar. 11, 2013
	カントー大学 Can Tho University	平28. 8. 21 Aug. 21, 2016
カンボジア王国 Kingdom of Cambodia	プノンペン王立法経大学 Royal University of Law and Economics	平19. 8. 24 Aug. 24, 2007
	王立農業大学 Royal University of Agriculture	平19. 11. 21 Nov. 21, 2007
	王立プノンペン大学 Royal University of Phnom Penh	平24. 11. 30 Nov. 30, 2012
ラオス人民民主共和国 Lao People's Democratic Republic	ラオス国立大学 National University of Laos	平22. 1. 26 Jan. 26, 2010
タイ王国 Kingdom of Thailand	カセサート大学 Kasetsart University	平8. 12. 6 Dec. 6, 1996
	コンケン大学 Khon Kaen University	平10. 9. 28 Sep. 28, 1998
	チェンマイ大学 Chiang Mai University	平17. 9. 9 Sep. 9, 2005
	アジア工科大学 Asian Institute of Technology	平19. 11. 21 Nov. 21, 2007
	モンクット王ラカバン工科大学 King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang	平20. 1. 3 Jan. 3, 2008
	タマサート大学 Thammasat University	平25. 2. 13 Feb. 13, 2013
インドネシア共和国 Republic of Indonesia	ハサヌディン大学 Hasanuddin University	平13. 3. 9 Mar. 9, 2001
	ガジャマダ大学 Gadjah Mada University	平13. 11. 1 Nov. 1, 2001
	サムラツランギ大学 Sam Ratulangi University	平14. 9. 13 Sep. 13, 2002
	リアウイスラム大学 Islamic University of Riau	平15. 7. 2 Jul. 2, 2003
	スリビジャヤ大学 Sriwijaya University	平19. 6. 11 Jun. 11, 2007
	ダルマプルサダ大学 Darma Persada University	平21. 9. 4 Sep. 4, 2009
	セベラスマレット大学 Sebelas Maret University	平23. 3. 28 Mar. 28, 2011
	ジュアンダ大学 Djuanda University	平23. 7. 15 Jul. 15, 2011
	マラン国立大学 State University of Malang	平23. 12. 7 Dec. 7, 2011
	ボゴール農業大学 Bogor Agricultural University	平23. 12. 27 Dec. 27, 2011
	ジャカルタ国立大学 State University of Jakalta	平26. 2. 11 Feb. 11, 2014
	ブラウィジャヤ大学 University of Brawijaya	平26. 4. 14 Apr. 14, 2014
バングラデシュ人民共和国 People's Republic of Bangladesh	バングラデシュ工科大学 Bangladesh University of Engineering and Technology	平13. 4. 27 Apr. 27, 2001
	ラジャヒ大学 Rajshahi University	平15. 5. 18 May. 18, 2003
	バングラデシュ農科大学 Bangladesh Agricultural University	平16. 8. 28 Aug. 28, 2004
	ジャハンギールナガール大学 Jahangirnagar University	平22. 7. 26 Jul. 26, 2010

	チッタゴン工科大学 Chittagong University of Engineering	平22．9．30 Sep. 30, 2010
	ダッカ工科大学 Dhaka University of Engineering and Technology	平25．2．20 Feb. 20, 2013
スリランカ民主社会主義共和国 Democratic Socialist Republic of Sri Lanka	ペラデニヤ大学 University of Peradeniya	平11．11．30 Nov. 30, 1999
パキスタン・イスラム共和国 The Islamic Republic of Pakistan	コハート科学技術大学 Kohat University of Science and Technology	平19．4．27 Apr. 27, 2007
	ペシャワール大学 University of Peshawar	平19．11．10 Nov. 10, 2007
英国 United Kingdom	グラスゴー大学 University of Glasgow	平10．7．17 Jul. 17, 1998
ルーマニア Romania	アレクサンドルイオンクザ大学 Alexandru Ioan Cuza University	平13．9．11 Sep. 11, 2001
フランス共和国 French Republic	ブルゴーニュ大学 L'Universite de Bourgogne	平15．7．1 Jul. 1, 2003
	オルレアン大学 L'Universite d' Orleans	平17．3．31 Mar. 31, 2005
ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany	ブルク・ギービヒェンシュタイン芸術デザイン大学ハレ Burg Giebichenstein University of Art and Design Halle	平29．3．30 Mar. 30, 2017
オランダ王国 the Netherlands	デザインアカデミーアイントホーフェン Design Academy Eindhoven	平28．10．19 Oct. 19, 2016
フィンランド共和国 Republic of Finland	ユバスキュラ大学 University of Jyvaskyula	平25．11．8 Nov. 8, 2013
ポーランド共和国 Republic of Poland	ルブリン工科大学 Lublin University of Technology	平18．3．3 Mar. 3, 2006
リトアニア共和国 Republic of Lithuania	ヴィータウタス・マグヌス大学 Vytautas Magnus University	平25．8．26 Aug. 26, 2013
アメリカ合衆国 United States of America	アンダーソン大学 Anderson University	昭53．12．27 Dec. 27, 1978
	カリフォルニア大学デイビス校 University of California, Davis	平9．7．24 Jul. 24, 1997
	パシフィック大学 Pacific University	平20．2．29 Feb. 29, 2008
	スリッパリーロック大学 Slippery Rock University	平24．4．4 Apr. 4, 2012
カナダ Canada	マニトバ大学 University of Manitoba	平17．8．8 Aug. 8, 2005
	ウィルフリッド・ロリエ大学 Wilfrid Laurier University	平22．7．13 Jul. 13, 2010
オーストラリア連邦 Australia	ラトローブ大学 La Trobe University	平15．7．31 Jul. 31, 2003
	シドニー工科大学 University of Technology, Sydney	平24．8．28 Aug. 28, 2012

資料５：平成28年度　国際交流推進センター関連行事

H28	佐賀大学の派遣・教育・支援	留学性に対する教育・支援	国際交流推進事業
4月	20日　世界とともに発展するSAGANグローバル人材育成事業学内説明会	5日　新入留学生オリエンテーション 5日　日本語コース・プレースメントテスト 6日　SPACE−E/Jオリエンテーション 30日　SPACE−Eフィールドワーク（福岡市、太宰府市）	11日　第1回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 22日　第2回国際交流推進センター運営委員会
5月		2日　留学生健康診断（～6日まで） 14日　SPACE−Jフィールドワーク（唐津市） 27日　新入留学生歓迎会	6日　第3回国際交流推進センター運営委員会（メール会議） 31日　第4回国際交流推進センター運営委員会
6月		3日　消防訓練（楠葉寮・国際交流会館） 4日　鹿島ガタリンピック＆ホームスティ（5日まで）	28日　第5回国際交流推進センター運営委員会
7月	3日　香港中文大学サマープログラム（～12日） 4日　佐賀大学サマープログラム（～22日）	9日　SPACE−J・日研生フィールドワーク（武雄市） 29日　SPACE−Eフィールドワーク（鳥栖市、朝倉市）	19日　第6回国際交流推進センター運営委員会（メール会議）
8月	6日　LEAFプログラム（カナダ）（～24日） 7日　大邱大学校プログラム（韓国）（～27日） 7日　カーティン大学プログラム（シンガポール）（～9／4日） 7日　浙江科技学院プログラム（中国）（～22日） 8日　DREaMプログラム（インドネシア）（～24日） 9日　中興大学プログラム（台湾）（～23日） 30日　輔仁−SAGAプログラム（台湾）（～9／7日） 30日　トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム学内説明	6日　栄の国まつり参加（栄の国まつり振興会主催）（～7日） 8日　佐賀地域留学生等交流推進協議会総会（佐賀地域留学生等交流推進協議会主催） 9日　SPACE・日本語・日本文化研修プログラム終業式	4日　第7国際交流推進センター運営委員会
9月	8日　世界とともに発展するSAGANグローバル人材育成事業派遣留学生壮行会	29日　新入留学生オリエンテーション、SPACE−Jオリエンテーション 30日　SPACE−Eオリエンテーション	30日　第8回国際交流推進センター運営委員会
10月		15日　新入留学生研修旅行（～16日　唐津市） 29日　SPACE−Eフィールドワーク（熊本市）	
11月		21日　留学生健康診断（～22日）	2日　第9回国際交流推進センター運営委員会 11日　全国国立大学法人留学生センター長及び留学生課長等合同会議 24日　国立大学法人等国際企画担当責任者連絡協議会（～25日まで）
12月	7日　交換留学経験者が語る留学＆就職活動体験談 11日　トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム学内説明会	8日　留学生対象の被爆体験講話 10日　SPACE−J・日研生フィールドワーク（有田町） 22日　Cultural Night	27日　第10回国際交流推進センター運営委員会（メール会議）
H29 1月		18日　九州で就職したい留学生のための就活セミナーin佐賀（九州留学生就職支援事業実行委員会主催）	
2月	15日　東華大学プログラム（台湾）（～3／19日） 18日　シドニー工科大学プログラム（オーストラリア）（～3／19日） 18日　カーティン大学プログラム（シンガポール）～3／18日） 19日　香港中文大学プログラム（香港）（～28日）	16日　SPACE終業式	7日　第11回国際交流推進センター運営委員会 11日　佐賀大学海外版ホームカミングデーinハノイ 17日　第12回国際交流推進センター運営委員会
3月	1日　浙江理工大学プログラム（中国）（～4／2日） 5日　大邱大学校プログラム（韓国）（～4／2日） 12日　VDU−SAGAプログラム（リトアニア）（～27日）		13日　第13回国際交流推進センター運営委員会 30日　第14回国際交流推進センター運営委員会

資料６：国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター規則

（平成23年９月28日制定）

（趣旨）

第１条　この規則は、国立大学法人佐賀大学基本規則（平成16年４月１日制定）第11条の７第２項の規定に基づき、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第２条　センターは、佐賀大学の部局及び地域社会と連携し一体となって、海外の教育研究機関との国際交流の進展に寄与することを目的とする。

（室及び部門並びに業務）

第３条　センターに、前条に掲げる目的を達成するため、国際交流企画推進室及び地域国際連携室並びに学生交流部門及び学術研究交流部門を置く。

２　国際交流企画推進室は、次に掲げる業務を行う。

⑴　国際戦略構想に基づく国際交流事業の企画推進に関すること。

⑵　国立大学法人佐賀大学（以下「本法人」という。）が海外に置くサテライトの整備、活用の施策・立案・実施に関すること。

⑶　重点交流大学の選定に関すること。

⑷　海外教育研究機関等との学術交流の協定及び学生交流の協定締結に関すること。

⑸　国際交流の危機管理体制の整備に関すること。

⑹　国際交流機関との連携に関すること。

⑺　国際広報に関すること。

⑻　卒業又は修了した留学生のネットワークの構築に関すること。

⑼　海外教育研究機関等の情報収集及びコーディネート業務に関すること。

⑽　その他国際交流に関すること。

３　地域国際連携室は、次に掲げる業務を行う。

⑴　地域社会及び産業界との国際交流推進のための連携・協力に関すること。

⑵　佐賀県、市町村、産業界、各種団体等と連携した国際交流事業の企画・立案・実施に関すること。

⑶　地域連携の国際ワークショップ等の企画・立案・実施に関すること。

⑷　地域社会、産業界、各種団体と連携した留学生の奨学基金事業の実施に関すること。

⑸　留学生の企業等のインターンシップ受入先の開拓に関すること。

⑹　留学生の就職活動支援に関すること。

⑺　地域社会と連携した留学生の支援に関すること。

⑻　佐賀地域留学生等交流推進協議会の運営に関すること。

⑼　留学生、地域社会、産業界及び各種団体とのコーディネート業務に関すること。

⑽　地域への広報に関すること。

⑾　その他地域国際連携に関すること。

４　学生交流部門は、次に掲げる業務を行う。

⑴　留学生受入れプログラムの開発支援に関すること。
⑵　奨学金、宿舎等の留学生受入環境及び学生派遣環境の整備に関すること。
⑶　重点交流大学とのジョイントプログラムの企画推進に関すること。
⑷　国際教育プログラムの実施支援に関すること。
⑸　海外教育研究機関等との学生交流の協定締結支援に関すること。
⑹　留学生の生活指導及び相談に関すること。
⑺　学生の派遣先の情報収集及び開拓に関すること。
⑻　留学生の渡日時及び渡日後の在留手続支援業務に関すること。
⑼　留学生の受入業務及び学生の派遣業務に関すること。
⑽　派遣学生の査証取得等の在留手続支援業務に関すること。
⑾　外国人留学生宿舎の管理運営に関すること。
⑿　その他学生交流に関すること。
５　学術研究交流部門は、次に掲げる業務を行う。
⑴　海外教育研究機関等との共同研究の促進に関すること。
⑵　海外教育研究機関等との学術交流協定の締結支援に関すること。
⑶　研究成果等の国際社会への情報発信に関すること。
⑷　国際シンポジウム、国際セミナー等の企画・立案・実施に関すること。
⑸　国際研究ネットワークの整備に関すること。
⑹　研究者の渡日時及び渡日後の在留手続支援業務に関すること。
⑺　研究者の受入業務及び派遣業務に関すること。
⑻　派遣研究者の査証取得等の在留手続支援業務に関すること。
⑼　外国人研究者宿舎の管理運営に関すること。
⑽　その他学術研究交流に関すること。

（鍋島サテライト）
第４条　センターに、鍋島地区における国際交流業務を遂行するため、鍋島サテライトを置く。
２　鍋島サテライトの業務に関し必要な事項は、別に定める。

（職員）
第５条　センターに、次の職員を置く。
⑴　センター長
⑵　副センター長
⑶　鍋島サテライト長
⑷　室長及び部門長
⑸　専任の教員
⑹　併任の教員
⑺　契約コーディネーター
⑻　その他必要な職員

（センター長）
第６条　センター長は、理事のうち学長が指名した者をもって充てる。

2　センター長は、本法人の国際交流事業をつかさどり、センター所属の職員を統督する。
3　センター長の任期は、当該理事の任期とし、再任を妨げない。

（副センター長）
第７条　副センター長は、本法人の専任の教授のうちからセンター長が指名した者をもって充てる。
2　副センター長は、センター長を補佐し、センターの業務を掌理する。
3　副センター長の任期は、２年とし、再任を妨げない。ただし、当該副センター長を指名したセンター長の任期を超えることができない。
4　副センター長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

（鍋島サテライト長）
第８条　鍋島サテライト長は、本法人の専任の教授のうちからセンター長が指名した者をもって充てる。
2　鍋島サテライト長は、センター長及び副センター長を補佐し、鍋島サテライトの業務を掌理する。
3　鍋島サテライト長の任期は、２年とし、再任を妨げない。ただし、当該鍋島サテライト長を指名したセンター長の任期を超えることができない。
4　鍋島サテライト長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

（室長及び部門長）
第９条　室長及び部門長は、センター専任の教員又は併任の教員のうちから、センター長が指名した者をもって充てる。
2　室長及び部門長は、室及び部門の業務を掌理する。
3　室長及び部門長の任期は、２年とし、再任を妨げない。ただし、当該室長及び部門長を指名したセンター長の任期を超えることができない。
4　室長及び部門長に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

（国際コーディネーター）
第10条　センターに、国際コーディネーターを置き、センターの専任の教員及び契約コーディネーターをもって充てる。
2　国際コーディネーターは、センター長及び副センター長を補佐し、センターの業務を横断的かつ包括的に処理する。

（専任の教員及び契約コーディネーターの選考）
第11条　専任の教員及び契約コーディネーターの選考は、第14条に定める運営委員会の議を経て、学長が行う。

（併任の教員）
第12条　併任の教員は、センター長及び部局長の推薦に基づき、運営委員会の議を経て、学長が任命する。
2　併任の教員は、室及び部門に配置し、国際コーディネーターと協働して、室及び部門の業務を処理する。
3　併任の教員の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（国際マネージャー）
第13条　センターに、国際マネージャーを置き、学術研究協力部国際課長をもって充てる。

２　国際マネージャーは、国際コーディネーター並びに室及び部門との調整を図る。

（運営委員会）

第14条　センターに、国立大学法人佐賀大学国際交流推進センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

２　運営委員会は、次に掲げる事項を審議する。

⑴　センターの管理運営の基本方針に関する事項

⑵　センターの人事に関する事項

⑶　本法人の国際化に係る具体的施策の策定及び実施に関する事項

⑷　センターの予算及び決算に関する事項

⑸　室及び部門での企画・立案に関する事項

⑹　その他センターの管理運営に関する重要事項

（組織）

第15条　運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

⑴　センター長

⑵　副センター長

⑶　鍋島サテライト長

⑷　室長及び部門長

⑸　専任の教員（国際コーディネーター）

⑹　各学部（理工学部を除く。）から選出された教員　各１人

⑺　工学系研究科から選出された教員　１人

⑻　全学教育機構から選出された教員　３人

⑼　契約コーディネーター（国際コーディネーター）

⑽　学術研究協力部国際課長（国際マネージャー）

２　前項第６号から第８号までの委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。

３　第１項第６号から第８号までに掲げる委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（議長）

第16条　運営委員会に委員長を置き、センター長をもって充てる。

２　委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

３　委員長に事故があるときは、副センター長がその職務を代行する。

（議事）

第17条　運営委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

２　運営委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。ただし、教員の人事に関する事項及び特に重要な事項については、出席した委員の３分の２以上の賛成を必要とする。

（専門委員会）

第18条　運営委員会に、専門的事項を審議するために、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

（意見の聴取）

第19条　運営委員会は、必要に応じて、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

（事務）

第20条　センター及び運営委員会の事務は、学術研究協力部国際課が行う。

（雑則）

第21条　この規則に定めるもののほか、センターに関し必要な事項については、運営委員会の議を経て、センター長が定める。

附　則

1　この規則は、平成23年10月１日から施行する。

2　国立大学法人佐賀大学国際貢献推進室設置規則（平成16年５月18日制定）は、廃止する。

3　この規則施行後、最初に任命される第７条の副センター長及び第８条の鍋島サテライト長並びに第９条の室長及び部門長の任期は、第７条第３項、第８条第３項及び第９条第３項の規定にかかわらず、平成25年３月31日までとする。

4　この規則施行後、最初に任命される第12条の併任の教員の任期は、同条第３項の規定にかかわらず、平成25年３月31日までとする。

5　この規則施行後、最初に任命される第15条第１項第６号から第10号までの委員の任期は、同条第２項の規定にかかわらず、平成25年３月31日までとする。

附　則（平成24年３月28日改正）

1　この規則は、平成24年４月１日から施行する。

2　この規則施行後最初に選出される第15条第１項第８号の委員の任期は、同条第２項の規定にかかわらず、平成25年３月31日までとする。

附　則（平成26年３月26日改正）

この規則は、平成26年４月１日から施行する。

附　則（平成27年３月26日改正）

この規則は、平成27年４月１日から施行する。

附　則（平成28年３月25日改正）

この規則は、平成28年４月１日から施行する。

資料７：国際交流推進センター運営委員会名簿

（平成28年４月１日現在）

国際交流推進センター長	理　事	滝　澤　　登
国際交流推進副センター長	教　授	寺　本　憲　功
国際コーディネーター	准教授	山　田　直　子
国際コーディネーター	准教授	新　美　達　也
国際コーディネーター	契約コーディネーター	山　田　佳奈美
国際マネージャー	課　長	成　瀬　雅　也

国際交流推進センター運営委員会委員

センター長	理　事	滝　澤　　登
副センター長	教　授	寺　本　憲　功
鍋島サテライト長	教　授	小　田　康　友
国際交流企画推進室長	教　授	早　瀬　博　範
地域国際連携室長	教　授	新　美　達　也
学生交流部門長	准教授	山　田　直　子
学術研究交流部門長	教　授	杉　山　　晃
国際コーディネーター	准教授	山　田　直　子
国際コーディネーター	准教授	新　美　達　也
国際コーディネーター	契約コーディネーター	山　田　佳奈美
国際マネージャー	課　長	成　瀬　雅　也
教育学部	准教授	石　崎　誠　和
芸術地域デザイン学部	准教授	ホートン・ステファニー・アン
経済学部	准教授	野　方　大　輔
医学部	教　授	熊　本　栄　一
工学系研究科	教　授	松　尾　　繁
農学部	准教授	辻　　一　成
全学教育機構	教　授	早　瀬　博　範
	准教授	布　尾　勝一郎
	准教授	中　山　亜紀子

国際交流企画推進室

教育学部	室長・教授	早　瀬　博　範
医学部	副センター長・教授	寺　本　憲　功
国際交流推進センター	准教授	山　田　直　子
国際交流推進センター	准教授	新　美　達　也
教育学部	准教授	後　藤　正　英
芸術地域デザイン学部	准教授	ホートン・ステファニー・アン
経済学部	教　授	ラタナーヤカ・ピヤダーサ
医学部	准教授	高　野　吾　朗

工学系研究科	教　授	萩　原　世　也
農学部	准教授	辻　　一　成
全学教育機構	准教授	古　賀　弘　毅

学生交流部門

国際交流推進センター	准教授・部門長	山　田　直　子
医学部	副センター長・教授	寺　本　憲　功
国際交流推進センター	准教授	新　美　達　也
教育学部	教　授	今　野　厚　子
芸術地域デザイン学部	准教授	石　崎　誠　和
経済学部	教　授	早　川　智津子
医学部	助　教	福　森　則　男
工学系研究科	教　授	松　尾　　繁
農学部	講　師	辻　田　忠　志
全学教育機構	准教授	丹　羽　順　子
全学教育機構	准教授	中　山　亜紀子
全学教育機構	准教授	江　口　　誠

学術研究交流部門

国際交流推進センター	教授・部門長	杉　山　　晃
医学部	副センター長・教授	寺　本　憲　功
国際交流推進センター	准教授・部門長	山　田　直　子
国際交流推進センター	准教授	新　美　達　也
経済学部	教　授	早　川　智津子
医学部	教　授	熊　本　栄　一
工学系研究科	教　授	大　渡　啓　介
農学部	准教授	野　間　誠　司

地域国際連携室

国際交流推進センター	准教授・室長	新　美　達　也
医学部	副センター長・教授	寺　本　憲　功
国際交流推進センター	准教授・部門長	山　田　直　子
教育学部	教　授	角　　和　博
経済学部	准教授	戸　田　順一郎
工学系研究科	教　授	柴　　錦　春
農学部	准教授	山　中　賢　一
全学教育機構	准教授	布　尾　勝一郎
全学教育機構	講　師	吉　川　　達

鍋島サテライト

教授・鍋島サテライト長	小　田　康　友
教　授	熊　本　栄　一
准教授	高　野　吾　朗
助　教	福　森　則　男

学術研究協力部　国際課

課　長	成　瀬　雅　也
副課長	木　寺　仙　明
係　長	江　崎　弘　幸
事務員	出　雲　大　輔
事務員	木　下　翔太郎
事務員	坂　本　　輝
事務補佐員	野　口　尊　子
事務補佐員	寺　坂　直　子
事務補佐員	一ノ瀬　明　子
国際アソシエイト	張　　舒

大学情報

佐賀大学国際交流推進センター

Center for promotion of International Exchange Saga University
840-8502　佐賀県佐賀市本庄町 1　　佐賀大学　国際交流推進センター
電話：0952-28-8203
Fax：0952-28-8819
http://www.irdc.saga-u.ac.jp